

「猫の首に鈴をつける」（1）——アステミーオ『百話集』をめぐって

‘Belling the Cat’(1): On Astemio’s *Hecatomythium*

伊藤博明*

Hiroaki ITO

1 ロドリゲス『日本語文典』と二つのイソップ寓話集

ポルトガル出身のイエズス会士、「通事」ジョアン・ロドリゲス (João Rodrigues, 1561-1633) は、1604年（慶長9年）から1608年（慶長13年）にかけて、長崎のコレジオから、浩瀚なポルトガル語による『日本語文典』(*Arte da Lingoa de Iapam*) ——のちに（1620年）マカオで彼が刊行した『日本語小文典』(*Arte Breve da Lingoa Iapoa*) に比して『日本語大文典』としばしば呼ばれる——を刊行した¹。その第1巻の「書き言葉の肯定活用直接法。未来に用いる助辞」(Particulas que servem ao futuro do Indicativo da escritura affirmativo) のひとつとして、「なん」(Nan) を説明して、「この助辞は動詞の語根に接して、直説法の未来を示す」(Esta particulas se ajunta as rayzes dos verbos, et be futuro do Indicativo)²と述べ、いくつかの例文を挙げている。その中に、次のような一文が見いだされる。

Xenzuru tocoro necono cubini suzuuo tçuquete voqui famberaba, yasuqu xinanto yū. Esopo. (詮ずるところ、猫の首に鈴をつけて置き待らば、やすくしなんといふ。「伊曾保」)³

イソップ寓話の一つとして、人口に膾炙していると思われる「鼠の会議」への、日本における最初の言及がこの引用文である。ロドリゲスが“Esopo”と記している出典は、もちろん、「イソップ寓話集」のことを指しており、わが国ではイエズス会士によって、1593年（文禄2年）に天草の学林（コレジオ）から、口語訳ローマ字本の『イソポのハブラス』(ESOPO NO FABVLAS) として、『平家物語』と『金句集』と合本されて刊行された⁴。これが、日本語に翻訳された、ヨーロッパ俗語文学の最初の作品であった。続いて、『イソポのハブラス』からほぼ20年後の1610年代、慶長末年から元和初年の間に、古活字本による国字本『伊曾保物語』が現れ、刊行年の記載がある1639年（寛永16年）まで、現在9種の刊本が知られている⁵。ところが、天草版『イソポのハブラス』と古活字本『伊曾保物語』とでは、最初に置かれた伊曾保伝での異同が多く見られ、また寓話については収められた内容がきわめて相違している。すなわち、天草版ローマ字本が70話を収めているのに対して、古活字本が64話を収めるが、両者に共通するのは25話にすぎない。他方、ロドリゲスの『日本語大文典』は、年代的には『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』の間に刊行されたが、この文典において挙げられている‘Esopo’からの引用文の性格は複雑である。かつ

* いたう・ひろあき

埼玉大学教養学部教授，思想史・芸術論

て土井忠生は、『日葡辞書』（1603年）における引用も含めて、次のように指摘していた。

日葡辞書に伊曾保物語から引用した文例は、Fab. と標したものの十一例、出典を標記しないもの数例を数へるが、すべて天草版口訳本に属する。然るに、ロドリゲスの日本語大文典に出典を「伊曾保」などと標して引用してある文例を見るに、口語文と文語文とがあつて、口語に六十余例は悉く天草版本の文と見做される。文語のものは二十一例に過ぎないのであるが、その中でも七例は天草版本に全く欠けてある寓話中の文であつて、国字文語本に一致し又は近似して居り、十例は天草版本にも相当した記述を存しながら、その口語文には遠く、国字本の文語文に甚だ近いものである。残る四例は、それとは反対に、国字文語本には遠くて天草版本に近いが、天草版本のみが有する寓話中の文であつて而も天草版本の口語文と似通つてあるものかである⁶。

土井は、すでに新村出が天草版本と古活字本に共通する「広本」文語訳の存在を示唆していたことを受けて⁷、彼自身の緻密な傍証も加えつつ、古活字本とは「別の文語訳本」が存在したと推測している。また、森田武の考察に従うならば、『日本大文典』に‘Esopo’などと出典を示された引用例は、天草版本に拠らない文語による文例を24含んでおり、それは四つの類にまとめられる。(1)天草版本に対応する本文がなく、古活字本に一致あるいは近似するものが7例。(2)対応する本文は両者にあるが、古活字本に一致あるいは近似するものが10例。(3)対応する本文は両者にあるが、天草版に近似するものが2例。(4)対応する本文が天草版本にだけあるものが5例である⁸。ロドリゲスが『日本大文典』

を執筆していたときに、天草版本は眼前にあったわけだが、それとは別の、おそらくは文語訳伊曾保物語をも参照していた。その稿本と両版との関係については、まだ完全には解決されていない⁹。

この問題はひとまず置くとして、『日本語大文典』に引用された、「鼠の会議」の物語からの一文は、森田武の分類の(1)、すなわち、天草版本に存在せず、古活字本に一致する文例に相応する。この物語は『伊曾保物語』（下）17として見いだされる¹⁰。

十七 鼠の談合¹¹の事

ある時、鼠老若男女相集まりて僉議しけるは、「いつもかの猫といふいたづら者にほろぼさるゝ時、千たび悔やめども、その益なし。かの猫、聲をたつるか、しからずは足音高くなどせば、かねて用心すべけれども、ひそかに近づきたる程に、由断して取らるゝのみなり。いかゞはせん」といひければ、故老¹²の鼠進み出でて申けるは、「詮ずる所、猫の首に鈴を付けてをき侍らば、やすく知なん」といふ。皆々、「もつとも」と同心しける。「然らば、このうちより誰出てか、猫の首に鈴を付け給はんや」といふに、上臈鼠¹³より下鼠に至るまで、「我付けん」と云者なし。是によつて、そのたびの議定¹⁴事終らで退散しぬ。

其ごとく、人のけなげだてをいふも、只疊の上の廣言也¹⁵。戦場にむかへば、つねに兵といふ物も震ひわなゝくとぞ見えける。しからずは、なんぞすみやかに敵國をほろぼさざる。腰抜けのみばかりひ¹⁶、たゝみ太鼓に手拍子¹⁷とも、これらの事を申侍べき。

鼠たちが、猫が近づくのを予め知るために、猫の首に鈴をつけることに決まったが、誰もその実行を申し出なかった、という物語の原型はここに求められる。そののち、『伊曾保物語』は1659年（万治2年）に、テキスト上は古活字本系に忠実な、15の挿絵の入った整本版が刊行されるが、それが古活字本系の最後の編纂書となった¹⁸。

2 「鼠の会議」——江戸から明治へ

他方、「鼠の会議」の物語は、1662年（寛文2年）の仮名草子『為愚痴物語』巻5第1話「鼠ども集まり談合評議の事」において、長文の物語に書き換えられて受容された¹⁹。また、1682年（延宝9年）頃に、嘶本『うかればなし』下巻第14話「鼠物語の事」において、笑話に仕立てられている²⁰。江戸も後期、1844年（天保15年）刊の、為永春水作・歌川貞重画の『絵入教訓近道』は、本文19話中の16話が『伊曾保物語』から採られたものであり、その中に「鼠の会議」も収録されている²¹。

鼠、談合するはなし

ある時、鼠の大勢集まりて談合しけるは、「いつも、かの猫といふ徒ら者に捕らるゝ時、千度悔ひても、その詮なし。かの猫、声を立てるか、足音でもすれば、かねて用心して、捕られる覚悟をするなれども、密かに近寄りて来る故、折り折り油断して捕らるゝなり。いかにせば良からん」と言ひければ、一つの鼠、進み出て申しけるは、「それには何より良き手段あり。かの猫の首へ鈴を付け置かば、たとへ足音はせずとも、此方に油断はあるまじ」といふにぞ、皆々、「尤も然るべし」と言ひけるが、大勢の鼠の中より、誰あつて、「猫の首へ鈴

を付けに行かう」という者なければ、ついに、その談合は止みにける。

その如く、人も後先の勘弁なく、了簡ありげに口を叩く者は、鼠に等しく、ついには恥をかくものなれば、「口は禍ひの門」と思ふべし。

○物言へばくちびる寒し秋の風

本文は古活字版『伊曾保物語』をほぼ踏襲しているが、物語の教訓としては、芭蕉の句を最後に据えて、不用意な発言を誡めるものとなっている。

明治期に入って、西欧の書物の翻訳は急速に進むが、イソップ物語も例外ではなく、英訳からの邦訳の成功が、それまでの古活字版『伊曾保物語』系統の伝統を駆逐することになる。当の書物とは渡部温『通俗伊蘇普物語』全6巻で、1873年（明治6年）4月と暮の二回に分けて、3冊ずつ刊行されたもので、全237話を含む²²。その原書は、前年（1872）に渡部が翻刻して刊行したトマス・ジェイムズ（Thomas James）の英訳本『イソップ寓話集』（*Aesop's Fables*）で、初版は1848年にロンドンでジョン・マレー（John Murray）によって刊行されているが²³、渡部が提出した出版願によれば、1863年に同じ書肆から刊行された版に拠っている。ただし『通俗伊蘇普物語』のすべての物語が、トマス・ジェイムズ版からの翻訳ではなく、巻6の一部は、初版が1867年にロンドンで刊行された、ファイラー・タウンゼント（Fyler Townsend）の『300のイソップ寓話集』（*Three Hundred Aesop's Fables*）²⁴から採られ、一部は古活字系『伊曾保物語』から採られている²⁵。そして、「鼠の会議」の物語はジェイムズ訳（初版）では第107番、『通俗伊蘇普物語』では第77番として現れている。

Fable CVII. The Mice in Council.

Once upon a time the Mice being sadly distressed by the persecution of the Cat, resolved to call a meeting, to decide upon the best means of getting rid of this continual annoyance. Many plans were discussed and rejected; at last a young Mouse got up and proposed that a Bell should be hung round the Cat's neck, that they might for the future always have notice of her coming, and so be able to escape. This proposition was hailed with the greatest applause, and was agreed to at once unanimously. Upon which an old Mouse, who had sat silent all the while, got up and said that he considered the contrivance most ingenious, and that it would, no doubt, be quite successful; but he had only one short question to put, namely, which of them it was who would Bell the Cat?

It is one thing to propose, another to execute²⁶.

寓話 107 「鼠の会議」

むかしむかし、猫の横暴にひどく苦しめられていた鼠たちが、意を決して会議を招集し、この不断の苦悩を取り除く最良の手段を見いだそうとしました。多くの方策について論じられ、また退けられました。最後に、若い鼠が立ち上がって、こう提案しました。「鈴の猫の首の周りに吊り下げたらどうでしょうか。猫がやってきても、いつも気がつくでしょうから、逃げのびることができます」。この提案は拍手喝采をもって歓迎され、直ちに満場一定で認められました。そのとき、それまで静かに座っていた年老いた猫が立ち上がって言いました。「この考案はきわめて才知に長けたものと思うし、上首尾に終わることは疑う余地がないだろう。だが、一つだけ質問がある。皆さんの中で、いったい誰が猫に鈴をつけ

るのかな」。提案することと実行することは別ものです。

第七十七 衆鼠商議の話

或頃鼠どもが猫に手ひどく苦られ。此害をのぞく好き手段もがなと。一夜衆鼠よりあひ商議をなして、だんかふをはじめたり。そのとき席上において種々の献策有て。夫々詮議を遂げられたれど。是ぞとおもふ謀計もなし。然るに最おほりに至つて遙か末坐より一疋の小鼠が進出。いと驕色に申上る様。「我輩の彼猫に多く取るゝは。畢竟彼の近寄るを知らずして。各油断するがゆゑなり。よつて此後は彼猫の項領に鈴をつけ置む。然るときは彼の来る事知れ易くして我逃る事遅からじ」と。衆皆此謀を聞て感伏し。異口同音に可然とぞ同じける。その時傍に黙然として扣みたる老鼠恐る進出。座中をきつと見渡して。物静に申上る様「此策極めて妙なり。其功効も亦著明かるべし。但し茲に承り度一事あり。誰殿が猫の領に鈴を付に参らるゝや

議論は議論実地は実地なり²⁷

ジェイムズ訳の原書を、渡部温は多少敷衍しながらも、文意を的確に把握したうえで、日本語への移し替えに成功していると言いうるだろう。爾後の、わが国におけるイソップ物語の受容と展開を考えるうえで、『通俗伊蘇普物語』はきわめて重要な位置を占めているのである²⁸。

3 イソップ寓話集の伝統における「鼠の会議」

これまで見てきたように、イソップ寓話としての「鼠の会議」は、その形態と内容は異なることがあっても、わが国において連綿と受け継

がれてきた。ところが、現在、学問的に信頼される校訂版に基づいた原典訳の「イソップ寓話集」を繙くとき、そこに「鼠の会議」を見いだすことはできない。たとえば、(1)旧岩波文庫版の山本光雄訳『イソップ寓話集』(1942年)、(2)新岩波文庫版の中務哲郎訳『イソップ寓話集』(1999年)、(3)岩波少年文庫版の河野与一訳『イソップのお話』(1955年)、(4)中公文庫版の塚原幹夫訳『新訳イソップ寓話集』(1987年)がそうである。それぞれが底本としたギリシア語原典は、(1)シャンブリ版²⁹、(2)ペリー版³⁰、(3)ハルム版³¹とシャンブリ版、(4)シャンブリ版であり、結局、「鼠の会議」は古代ギリシア以来、アイソポス(イソップ)に帰されてきたギリシア語による寓話集には含まれていないのである³²。シャンブリ版を底本とした、渡辺和雄訳『イソップ寓話集』(全2巻、小学館、1982年)では、いわば補遺として、『猫の書』(リプロ・デ・ロス・ガトス)第55話より、以下の物語を訳出している(第2巻、235-236頁)。

ネズミどもとネコのたとえ

あるときネズミたちが集まって会議を開き、ネコから身を守るには、どうしたらよいか話しあいました。中でも一ぱん知恵のある一ぴきのネズミがいました。

「ネコの首に鈴をつけよう。そうすれば、とてもうまくネコから身を守ることができる。ネコがどこを通りすぎても、かならず鈴の音が聞こえるからさ。」

この意見にはみんなが賛成しました。ところがこういったネズミがいました。

「そのとおりだ。だが、だれがネコの首に鈴をつけるのかね？」

「おれはいやだ。」と、一ぴきが答えました。

「わたしもいやだね、ネコのそばへいくな

んでまっぴらごめんだね。」

べつのネズミもそういいました。

これと同じように、聖職者や修道士たちは、位の高い司祭や、なかには司教にたいして決起しようとするものがよくあるものです。

「ねがわくば、あの司教をやめさせて、べつの司教なり修道院長にかわればよいのだが。」これにはみんなが大賛成。ところで最後に、「司教をとがめだてするものは、せつかくの地位をうしない、以後ひどいことになる。」という、ひとりがいました。「わたしはいやだ。」べつの人も、「わたしはいやだ。」このように、位の低い人たちが高い人たちをやめさせようとしないうのは、敬愛しているからではなく、こわいからです。

『猫の書』(*Libro de los gatos*)という書物については別稿で検討することにして³³、少なくとも、古活字系の『伊曾保物語』と、渡部温訳『通俗伊蘇普物語』(および、その原書であるジェイムズ訳『イソップ寓話集』)は、ギリシア語原典とは別の典拠から「猫の会議」の物語を採用したことは明らかである。ジェイムズ訳では、副題に「主として原典に拠る新版」と注記してあったが、「序文」において、翻訳が古典からの「自由な訳」(*free translation*)であることを断ったうえで、典拠として、多くの古代と近代の寓話集、具体的にはギリシアのエピグラム、ホラティウスの逸話、パブリオスのギリシア語詩篇、パエドルスのラテン語詩篇を挙げている。そして、レストレンジから少数の寓話を採録したと述べている³⁴。

ロジャー・レストレンジ(Roger L'Estrange, 1616 - 1704)は英国の文筆家で1692年に500余の寓話を蒐集した『イソップ寓話集、および

他の著名な神話作家たちの寓話集』(*Fables of Aesop and Other Eminent Mythologist*) を刊行した³⁵。ジェイムズが扱った数少ない典拠がこの『イソップ寓話集』であり、「鼠の会議」の物語もおそらくは、レストレンジを経てジェイムズ版『イソップ寓話集』に収められることになったと思われる。そして、当該の物語「鼠たち、猫、鈴」は、レストレンジ版「イソップ寓話集」の「補遺」中、アブステミウス (Abstemius) 集に属している。

Fab. CCCXCI. Mice, Cat and a Bell.

There was a Devilish Sly Cat it seems, in a certain House, and the Mice were so Plagu'd with her at every turn, that they call'd a Court to advise upon some way to prevent being surpriz'd. If you'll be Rul'd by me, (says a Member of the Board,) there's nothing like Hanging a Bell about the Cat's Neck, to give Warning before-hand, when Puss is a coming. Well (says another) and now we are agreed upon the Bell, say who shall put it about the Cat's Neck. There was no body in fine that would undertake it, and so the Expedient fell to the Ground.

The Moral.

The Boldest Talkers are not always the Greatest Doers.³⁶

寓話 391 番「鼠、猫、鈴」

ある家に、悪魔のように悪賢いと思われる猫がいました。鼠たちはことあるごとに、この猫から酷い目にあってきたので、評議会を招集して、不意打ちをくわない方法について相談しました。「もしあなた方が私に同意してくれればだが」と、ある評議員が言いました。「猫の首に鈴を吊り下げるならば、かの奴が来ても事前に警告が鳴

るに相違ない」。鼠たちは皆、ここで取りうる最上の方策であると見なしました。「よろしい」と、別の評議員が言った。「われわれは鈴について同意したわけだが、誰が猫の首にそれをつけるのだろうか」。結局、それを試みようとする鼠は一匹もいなかったのので、この計画は失敗に帰しました。

「教訓」

最も勇敢な話者が、必ずしも最も偉大な行為者というわけではありません。

レストレンジ版『イソップ寓話集』に匹敵する量の寓話を含み、かつ圧倒的な成功を収めた、1668年刊行のジャン・ド・ラ・フォンテーヌ (Jean de La Fontaine, 1621-1695) の『寓話詩』(*Fables choisies mises en vers*) にも、これまで見た物語とは趣が異なるが、「鼠の会議」が含まれている(巻の2、2)。

ロディラルドゥスという名のネコがネズミたちをさんざんにやっつけて、ほとんどその姿を見かけなくなるまでにかれらを墓のなかへ送りこんだ。わずかに残った者どもも、穴から出ていく勇気がなく、たっぷり食べたころの四分の一しか食べものがみつからなかった。そしてロディラルールは、このみじめな種族のあいだで、ネコではなく、悪魔と考えられた。さて、あるとき、そのはりきりネコが高いところ、遠いところへ妻をたずねて行き、奥方と乱痴気騒ぎをやっているあいだに、残ったネズミたちは、どこかの片隅で会議をひらき、

目下の緊急事項について協議した。冒頭に、議長は、思慮に富むお方だったが、ロディアルの頸に鈴をつけねばならぬ、それもなるべく早急に、という意見を述べた。

そうすれば、戦争をしかけてくるとき、やってくるのがすぐにわかって、床下にもぐれる、

わしはこの方法しか考えられぬ、と。

一同、議長の意見に賛成だった。

それ以上効果的なことはないとだれにも考えられた。

困難は鈴をつけることにあった。

ひとりと言った。「わたしは行かない。わたしはそんなばかではない。」

もうひとは、「わたしにはできそうもない。」そんなことで、なすこともなく、

会議は散会。これと同様むだに終わった会議を、私はいくらか見ている。

ネズミのではない、修道士たちの会議、

さらに、教会参事会議だ。

論議するだけなら

議員は大勢いる。

実行が問題になると

だれもいなくなる³⁷。

ラ・フォンテーヌは自由闊達に語っているが、紛れもなく下敷きとなっている逸話は「鼠の会議」であり、その典拠についても、従来から、アステミーオの『百話集』(*Hecatomythium*)が指摘されてきた³⁸。

4 アステミーオと「イソップ寓話集」

ラテン名ラウレンティウス・アプステミウス (*Laurentius Abstemius*)、イタリア名ロレンツ

オ・アステミーオ (*Lorenzo Astemio*) は、15世紀後半のイタリアで活躍した群小ヒューマニストの一人である³⁹。彼は1435年から1440年の間に、イタリア中部、現在はマルケ州に位置するマチェラータ・フェルトリーアに生まれ、1472年には、ウルビーノ近郊の町カッリのジロラモ・リアーリオに書記として雇用されている。すでに文法家として評判を得ていたようであり、当地では、いくつかの書物の編集・出版に携わった。この仕事が認められて、1476年にはウルビーノに移住し、ガイドバルド・ダ・モンテフェルトロのもとで図書館長に地位についた。さらに1490年には、リミニから、マラテスタ家のパンドルフォとカルロの家庭教師として呼ばれた。

アステミーオはウルビーノ時代から、世界中の全都市についての歴史的・地理的事典を書き続け(草稿がヴァチカンのウルビーノ手稿に含まれている)、また、対話体で、オウィディウスの『イービス』に注釈を施した小作品『いくつかの不明瞭な箇所についての二書』(*Libri duo de quibusdam locis obscuris*)を執筆した(ヴェネツィアで1494年に刊行)。しかし、彼がとりわけ意を注いだのが、イソップ風寓話集の作成であった。のちに『百話集』と呼ばれることになる、アステミーオの寓話集の第一集は、ロレンツォ・ヴァッラの「イソップ寓話集」(30話)のラテン語訳とともに、1495年にヴェネツィアで次のタイトルで刊行された。

*Fabulae ex graeco in latinum per Laurentium Valla virum clarissimum versae. Fabulae ex graeco in latinum per Laurentium Abstemium virum clarissimum versae*⁴⁰。

高名な人士ラウレンティウス [ロレンツォ]・ヴァッラによってギリシア語からラテン語に訳された寓話詩。高名な人士ラウ

レンティウス・アプステミウス [ロレンツォ・アステーミオ] によってギリシア語からラテン語に訳された寓話詩

アステーミオがここで、自らが「ギリシア語からラテン語へ訳した」と述べているのは正確ではない。彼の名のもとに集められた寓話は、いくつかが中世の源泉へと遡ることができるとはいえ、ほとんどの作品は、アステーミオ自身によって考案され、執筆されたものなのである。実際、1499年にヴェネツィアで再版された際には、「ラテン語に秀でた人士ロレンツォ・アステーミオによって、新たに作成された寓話」(Fabulae per latinissimum virum Laurentium Abstemium nuper compositae)⁴¹と題されている。

アステーミオは、オッタヴィアーノ・ウバルディーノ宛の序文においては、自らの寓話観を披瀝している。彼はまず、自らの寓話集が対象として読者が、学識ある人物 (docti) であり、高邁な人士 (calri viri) であると述べる。こうした人々にこそ、礼儀作法の諸規則が課せられているのであり、寓話 (apologi) は、無知のために陥りがちな不作法から人々を遠ざける。ただし寓話がモラルを説くといっても、そこには読者の精神を適度に楽しませる「喜び」(joci) がなければならない。そして寓話は、ある驚くべき「快」(voluptas) によって、貴く有益な事柄へとわれわれの魂を導くのであるが、それは、「哲学者たちが彼らの規範によって誘う」よりもはるかに効果的なのである⁴²。彼によれば、寓話は、教訓を無味乾燥な言説によって直接的に語る代わりに、動物の行動から引き出された、楽しい物語を通して、間接的に読者の精神に行き渡らせるのである。具体的にアステーミオが創案した寓話の一つは、以下のようなものである。

De Mure in cista nato. Fabula 1.

Mus in cista natus, omnem fere ibi duxerat aetatem, nucibus patus, quae in ea servari solebant. Dum autem circa oras cistae ludens dedicisset, quaereretque ascensum, reperit epulas lutissime paratas, quas quum gustare caepisset, quam stultus inquit hactenus fui, qui in toto terrarum orbe nihil melius cistula mea esse credebam. Ecce quam suavioribus hic vescor cibis. Haec fabula indicat, non ita patriam diligendam, si ignobilis sit, ut alia non adeamus loca, quam alibi beatiores esse possumus.

寓話1 箱の中で生まれた鼠について

箱の中で生まれた鼠は、ほとんどすべての時間をそこで過ごし、そこにいつも供されるクルミを食べていた。あるとき、箱の縁で遊んでいて下に落ち、上に登ろうとしていたところ、豪華な料理を見つけ、それを食べ始めた。そして言った。「これまで、この世界で、私の小箱よりも素敵なものはないと信じていたとは、何と愚かだったことか。ここでは、こんなに美味しいものを食べることができるのに」。この寓話は、われわれは、他の土地でより幸せになれるかもしれないのに、無知のまま、他の場所に足を踏み入れないほどに祖国に執着してはならない、ということを教えている。

アステーミオが自らの寓話集を、ロレンツォ・ヴァッラの「イソップ寓話集」のラテン語訳とともに刊行したのは、当時のイソップ寓話集の博していた人気と、ヴァッラのヒューマニストとしての圧倒的な名声を利用しようとしたと考えても誤りではないであろう。

ルネサンス期におけるイソップ寓話集の編纂と流布については、対象とすべき作品がきわめ

て多数存在し、また、それらの構成と内容も複雑であるために本稿では論及しえないが、15世紀のイタリアの状況についてだけ瞥見しておきたい⁴³。イソップ寓話集は中世ヨーロッパにおいても、ロムルス集、アウィアヌス集、「教訓版イソップ」(*Aesopus moralisatus*)などのラテン語作品を通して知られていたが、15世紀に入ってギリシア語原典がイタリアに伝えられると、ヒューマニストたちがこぞって翻訳に取り組んだ。まずグアリーノ・ダ・ヴェローナ(Guarino da Verona)が1422年頃に28篇を、続いてエルモラオ・バルバロ(Ermolao Barbaro)が1422年に33篇を、オニベーネ・ダ・ロニーゴ(Ognibene da Lonigo)が1430年頃に124篇を、ロレンツォ・ヴァッラが1438年頃に33篇を、そしてリヌッチョ・ダ・カスティリオーネ(Rinuccio da Castiglione)——レミキウス、またはレヌティウスとも呼ばれる——が1440年に、「イソップ伝」とともに100篇を、それぞれ訳出している⁴⁴。

これらのラテン語訳の中でも、印刷本によってよく読まれたのは、リヌッチョ・ダ・カスティリオーネとともに、ロレンツォ・ヴァッラによるものである。最初のラテン語版が1473-74年頃に、おそらくはヴァレンシアで刊行されて以来⁴⁵、15世紀中に14の版を数え、出版地もデーヴェンテル(オランダ)、サラマンカ、パンプロナ(スペイン)、ズウォレ(オランダ)、ヴァレンシア、レリダ(スペイン)、ナポリ、アントウェルペン、ヴェネツィアと、ヨーロッパ中に拡がっていた⁴⁶。また、ポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』(*Facetiae*)およびフランチェスコ・ペトラルカの『著名人の機知と創意について』(*De salibus virorum illustrium ac facetiis*)と合本され、パリなどで計3版が公刊されている⁴⁷。

ヴァッラによる「イソップ寓話集」について

も、最初の1話を紹介しておきたい。

1 De vulpe et capro.

Vulpes et caper sitibundi in puteum quandam descenderunt, in quo cum perbibissent, circumspicienti reditum capro vulpes ait: “Bono animo esto, caper, excogitavi namque quo pacto uterque reduces simus. Si quidem tu eriges te rectum, primoribus pedibus ad parietem admotis, cornuaque, addcto ad pectus mento, reclinabis, [et] ego per terga cornuaque tua transiliens et extra puteum evadens, te instinc educam.” Cuius consilio fidem habente capro atque, ut illa iubebat, obtemperante, ipsa e puteo prosiliit, ac deinde prae gaudio in margine putei gestiebat exultabatque, nihil de capro curae habens. Ceterum cum ab hirco ut foedifraga incusaretur respondit: “Enimvero, hirce, si tantum tibi esset sensus in mente quantum est setarum in mento, non prius in puteum descendisses quam de reditu exploratum habuisses.” Hanc fibula innuit virum prudentem debere finem explorare antequam ad rem agendam veniat⁴⁸.

1 狐と山羊

喉が渴いた狐と山羊が井戸の中へ降りて行きました。そこで水を飲み終わり、帰り道を探している山羊に向かって、狼はこう言いました。「安心なさい、山羊さん。どうしたら、われわれ両方とも帰ることができるかは考えてありますから。あなたが真っ直ぐに立って、前の両脚を壁に押しつけ、顎を胸の方に引いて、二つの角を壁につけるならば、私があなたの背中と角をつたって、井戸の外に出て、それからあなたを引きあげましょう」。山羊はこの提案を信用して、狼の命じたように行くと、狼は

井戸から飛び出て、大喜びで、井戸の周りを飛び跳ねましたが、山羊のことは一切かまいません。そして、山羊から、約束違反を責められると、こう答えました。「さて、山羊さんよ。もしお前に、顎に生える髭ほどの知恵があったならば、井戸に降りる前に、そこから戻ることを考えただろうに」。この寓話は、賢い者ならば、行動に移す前に結果について考えておかねばならない、ということをお話しています。

この物語は、イソップ寓話の中でも有名なものの一つであり、ギリシア語で残されている写本のほとんどに見いだされ⁴⁹、また、パエドルス（前15年頃～後50年頃）の『イソップ風寓話集』⁵⁰や、紀元後1世紀頃に成立したバブリオスの『イソップ風寓話集』散文パラフレーズ⁵¹にも収められている⁵²。ヴァッラ訳の「イソップ寓話集」は、その後、ハインリヒ・シュタインヘーヴェル（Heinrich Steinhovel, 1412-1479）が編纂し、1476年もしくは77年にウルムで刊行された浩瀚な寓話集成『イソップ』（*Esopus*）⁵³が版を重ねてからも、さまざまなイソップ風寓話集成に収められて人気を博することになる⁵⁴。

イタリアのヒューマニストはまた、自ら寓話の翻案や作成を試みており、アステーミオ以前にもいくつかの寓話集が編纂された。最初期の作家としてはグレゴリオ・コッレール（Gregorio Correr）が挙げられ、彼が1429年頃に編んだ60ほどからなる寓話集には、オニベアーネの翻訳と、自らが手を入れた中世の寓話が含まれていた⁵⁵。他方、レオナルド・ダーティ（Leonardo Dati）は、1430年頃に40話からなる寓話集を⁵⁶、また、フランチェスコ・フィレルフォ（Francesco Filelfo）も15世紀中葉に『32の寓話』を作成した（刊行は1480年）。レオン・バッティスタ・

アルベルティ（Leon Battista Alberti）は、1437年に『百の寓話』（*Centum apologi*）を作成したが⁵⁷、それを範として、バルトロメオ・スカーラ（Bartolomeo Scala）は、2種類の寓話集を、すなわち『百の寓話』（*Apologi centum*, 1481）、『第二寓話集』（*Apologorum liber secundus*, 1488-92）を刊行した。明らかにアプテミウスは、このような文学的趨勢に影響を受けて、『百話集』を作成したと思われる。そして、彼もスカーラのように、『百話集』の第二集を編んで、別の2作品とともに1505年にファーニで、以下のタイトルで刊行した。

Granii Corococtae Porcelli testamentum.
Laurentii Abstemiini Maceratensis
Hecatomythium secundam. Eiusdem libellis De
verbis communibus. Fani, 1505.

グラニウス・コロコタ・ポルケッルススの遺言書。マチュエラータ人ロレンツォ・アステーミオの第二・百話集。同人による、基本的語彙集。

最初の作品は、「ポルケッルス」（文字通りには子豚）による、本人は「手が書けないので」代書してもらった、4世紀に著された遺言書のパロディであり、「基本的語彙集」は主にラテン文法を学ぶ者が対象とされている。この『第二・百話集』はヴァッラの名声に頼らない、アステーミオ個人の作品と見なすことができるが、しばらくして大きな成功を見ることになる。1520年と1539年にはヴェネツィアで、最初の『百話集』と合本で再版され、その後はイタリア以外の国々で陸続と刊行された。パリでは1529年、1535年、1536年、1544年、1545年、リヨンで1537年、1540年、バーゼルで1523年、フランクフルトで1610年、1660年、という具合である。また、1572年にはオルレアンで仏語訳『ロ

レンツォ・アステミオの百話集、すなわち『*L'Hécatomythium ou les fables de Laurent Abstemius* traduit du latin, Orléan: Eloy Gibier) が出版されている⁵⁸。

5 アステミオと「鼠の会議」

他のヒューマニストの寓話集と同様に、アステミオの『百話集』が16世紀のヨーロッパ人から歓迎された理由は、イソップ寓話集の本来の特徴である、主に動物の(しばしば想像上の)性格を踏まえた上での教訓性というよりも、むしろ、当時のさまざまな階層の人々の言行をとときには愉快地、ときには辛辣に、ときには猥雑に描いたことに求められるであろう。『百話集』は、13世紀末にフィレンツェで成立した、作者不詳の『ノヴェッリーノ』(*Novellino*)に端を発し、ジョヴァンニ・ボッカッチョ(Giovanni Boccaccio, 1313-1375)の『デカメロン』(*Decameron*, 1353)、フランコ・サッケッティ(Franco Sacchetti, c.1330-c.1400)の『三百のノヴェッラ』(*Trecento novelle*, 1395)と続き、15世紀のイタリアで発展した、文学史上の一ジャンル「ノヴェッラ」に属する作品なのでもある⁵⁹。アステミオのこのような側面を示す寓話として、『第二・百話集』から、次の一話を挙げることができるだろう。

De milite timente includi in oppido obsidendo ob auxilia a longe ventura.

Miles quidam prudens, invitatus a commilitonibus suis ut cuidam Italiae oppido, quod ad regem Gallorum defecerat, una cum eis vellet esse praesidio: — Si proprius — inquit — loci dominus oppidum obsidebit, quis nobis suppeditabit auxilium? — Tunc illi: — Rex — inquiunt — Gallorum. — Miles,

tumulum quendam conscendens: — O rex Gallorum! — ter alta voce clamavit. Quoniam autem nullum sibi redderetur responsum, conversus ad invitantes: — Nolo — inquit — illuc accedere, ubi qui mihi suppetias daturus est, auxilium implorantem non audiat. — Coeteri, qui illuc accesserunt, a proprio oppidi domino obsessi, expugnato oppido, capti et iugulati sunt.

Fabula indicat stultos et amentes esse, qui sese periculis imprudenter obiiciunt⁶⁰.

占領された町で、援助を長らく待ちながら、閉じ込められるのを恐れる兵士について。

ある賢い兵士が、仲間の兵士たちから、ガッリア人の王に反旗を翻した、あるイタリアの町を一緒に防衛に行かないかと誘われたとき、彼らに対して、「その土地の支配者が町を制圧しようとしているときに、誰がわれわれに援助の手を差しのべてくれるのか」と言った。そこで彼らは、「ガッリア人の王です」と言った。その兵士は小山に登って、「おお、ガッリア人の王様よ」と、とりわけ大きな声で叫んだ。何も返事がなかったので、彼は誘ってくれた者たちの方を向いて言った。「私は遠慮しておこう。というのも、私を助けてくださる御方が、援助を求めているとは納得しかねるのでね」。その町にはせ参じた、他の者たちは、まさに町の支配者によって圧迫され、町が制圧されると、捕らわれ、殺された。

この寓話は、愚かで間抜けな者とは、自分自身を分別なく危険にさらす者であることを示している。

このようなノヴェッラが、本来のイソップ寓

話集と併存しえたことについては、ルネサンスにおけるイソップ寓話集の受容と、上述したヒューマニストによる新しい寓話集の案出を考へれば、十分に理解しうることである。たとえば、ヴァッラと並ぶ希代のヒューマニスト、ポッジョ・ブラッチョリーニ（Poggio Bracciolini, 1380-1459）は、1438年から1452年にかけて、『笑話集』（*Fecetiae*）と題する、272話からなる風俗譚・艶笑譚の集成を著している。そして、シュタインヘーヴェル編の「イソップ寓話集」に、この『笑話集』から7話が採録されているのである⁶¹。この点を考慮に入れるならば、アステミーオの最初の『百話集』が、ヴァッラのラテン語訳「イソップ寓話集」を伴って刊行されたことは異例なこととは言えないだろう。そして、アステミーオの死後（1508年以前に死去）、依然として『百話集』とヴァッラのラテン語訳の合本が刊行される一方⁶²、陸続と現れるイソップ風寓話集成の中に『第二・百話集』もまた収められた。おそらく、その最初の版は、1513年のヴェネツィアで刊行されたもので、タイトルは以下の通りである。

Aesopi Phyrigis fabulae CCVIII a Graeco in Latium conversae. Eiusdem fabulae XXXIII per Laurentium Vallam (...) versae. Laurentii Abstemii Maceratensis Hecatomythium primum, hoc est fabulae centum. Eiusdem Hecatomythium secundum, hoc est fabulae centum. Eiusdem libellus de verbis communibus. Venezia: Johannes Tacuinus, 1513⁶³.

すなわち、この書物には「ギリシアからラテン語に翻訳された」イソップの寓話 208 篇、ロレンツォ・ヴァッラ訳の寓話 32 篇、アステミーオの『第一・百話集』と『第二・百話集』、そし

て、アステミーオによる「基本語彙集」が含まれている。次の版は、1519年にヴェネツィアと同じ書肆から刊行されているが、内容については大きな異同が見いだされる。タイトルは以下の通りである。

Continentur in hoc volumine. Aesopi Pyrgis fabulae CCXIII e Graeco in Latinum elegantissima oratione conversare. Eiusdem fabulae XXXIII per Laurentium Vallam, virum clarissimum, versae. Eiusdem fabulae LXIII a Salone Parmense versu elego latinitate donatae. Eiusdem fabulae XLII elego quoque versu ab Aviano translatae. Laurentii Abstemii Maceratensis Hecatomythium primum, hoc est centum fabulae. Eiusdem Hecatomythium secundum, hoc est centrum fabulae. Eiusdem libellus de verbis communibus⁶⁴.

すなわち、この大部の寓話集成には、「ギリシア語からラテン語訳された」イソップの寓話 214 篇、ロレンツォ・ヴァッラ訳の寓話 33 篇、サロ・パルメンシス（サローネ・ダ・パルマ、5～6世紀）訳の寓話 63 篇、アステミーオの『第一・百話集』と『第二・百話集』、そして、アステミーオによる「基本語彙集」が収められている。

上述したように、レストレンジは、自らの編纂した「イソップ寓話集」に収めた「鼠の会議」の物語は、「アプテミウス集」から採ったものであることを明言していた。そして、当該の物語は『第二・百話集』の終わり近くに見いだされる。この作品を含んだイソップ寓話集成は、その後も数多く刊行された。1519年版はヴェネツィアで1520年に再版されているが⁶⁵。また、1522年と1539年のヴェネツィア版は、「イソップ寓話集」とアステミーオの『第一・百話集』と『第

二・百話集』を収めたものである⁶⁶。また、1535年頃刊行のチューリヒ版や1542年のリヨン版は、ヴァッラやアステーミオの他に、いくつもの寓話集を含んだ浩瀚なものである⁶⁷。その後も同様な版は刊行されたと考えられるが、おそらくレストレンジは、そのいずれかから採取したのであろう。ラ・フォンテーヌの場合は、1572年の仏語訳に拠ったことも考えられる⁶⁸。アステーミオによる「鼠の会議」の内容は以下の通りである（底本は1519年版に拠り、ca.1535年版、1539年版、1542年版を参照した）。

De muribus tintinabulum feli suspendere
volentibus. 95 [ed. ca.1535, 1539, 1542: 96]
Mures in unum convenientes, consultabant,
quo ingenio, quae arte felis insidias possent
euitare. Tunc qui caeteros et aetate, et rerum
usu anteibat, reperi inquit uiam, quae nos a
tantis periculis incolumes conseruabit, si mihi
parere uolueritis. Suspendamus collo eius
tintinabulum, cuius sonitu uenientem aduersus
nos felem sentire possimus. Tunc omnes uoce
consona sententiam illius ut saluberrimam
laudauerunt, atque [ed. ca.1535, 1539, 1542:
itaque]; faciendum esse dixerunt. Surgens
autem quidam senior, imperato silentio: Ego
quoque, inquit, istam sententiam approbo. Sed
quis erit qui collo felis tintinabulum
suspendere audeat? [ed. ca.1535, 1539: “.”]
Quum autem omnes hanc prouinciam
subterfugerent, irrita sententia fuit. Fabula
indicat, multos quae facienda sunt laudare, sed
qui ea facere uelint, paucos reperiri.

95 猫の首に鈴を吊そうとする鼠たち
について

鼠たちが一同に会して、いかなる知恵に

よって、いかなる術策によって、猫の罠を逃れることができるかを相談していました。そのとき、他の鼠たちよりも年齢においても経験においても秀でていた一匹が、もし皆が従おうとするならば、多くの危険に遭遇することのない方法を見いだしたと言いました。「われわれは、猫の首に鈴を吊すことにしよう。猫がわれわれの方に向かって来れば、その鈴がなるので、われわれは猫に気づくだろう」。そこで、猫たちは皆、声をそろえて、この意見をきわめて有用なものと誉めたたえ、そうすべきだと語り合いました。ところが、年老いた鼠が立ち上がり、一同が静まったところで、こう言いました。「私もまた、その意見には賛成である。しかし、いったい誰が、猫の首に鈴を吊そうという危険を冒すであろうか」。結局、鼠は皆、この務めを避けたので、その意見も無駄になりました。この寓話は、多くの者が為すべきことを称讃するが、それを行う者は少ない、ということを教示しています。

こうして、渡部温『通俗伊蘇普物語』の「衆鼠商議の話」へと続く、トマス・ジェイムズ、そしてレストレンジの源流は確かめることができた。しかし、古活字版による国字本『伊曾保物語』に収められた「鼠の談合の事」の典拠は、はたして、アステーミオに、それも上記のいずれかの版の記述に求められるであろうか。「鼠の談合の事」の本文は、アステーミオの記述に比べて、きわめて内容の豊かなものとなっており、後付の教訓も趣が異なっている。他方、先に示唆したように、「鼠の会議」はアステーミオ自身の創案ではなく、中世以来の長い伝統に負っており⁶⁹、同時代においても、たとえば、ノヴェッラ作家のアロット（Arlotto）の『笑話集』

(*Facezie*, 1568)、ルドヴィーコ・ドメニキの『笑話集』(*Facecies, et motz subltiz*, 1548)、ガブリエッロ・ファエルノ (*Gabriello Faerno*) の『寓話集』(*Fabulae centum ex antiquis auctoribus delectae et carminibus explicatae*, 1564) で採りあげられている。アステーミオの著作が「イソップ寓話集」と合本で刊行されていたことを鑑みるならば、『伊曾保物語』の典拠がそこにあった蓋然性は高いだろう。しかしその場合も、依拠した刊本に関しては、別に考慮すべき点が存在している。

すでに述べたように、天草本『イソポのハブラス』にしても、古活字本『伊曾保物語』にしても、それらが邦訳に際して依拠した主たる原典については、シュタインヘーヴェル編纂の「イソップ寓話集」であることが夙に小堀桂一郎氏によって指摘された⁷⁰。ただし、そこに見いだされない寓話が6つほど指摘されており、典拠とする作品が同定できていない寓話も存在する。遠藤潤一氏は長期にわたる研究の末に、原典として、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」のスペイン語版、そして、リヨンで1542年にセバステリアン・グリフィスが刊行した「イソップ寓話集」系統のラテン語版を推測している⁷¹。シュタインヘーヴェル版に含まれていない寓話の問題に限って言えば、『伊曾保物語』(下30)「人の心のさだまらぬ事」は、シュタインヘーヴェル版「イソップ寓話集」の、スペイン語版で新たに付加された、ポッジョ・ブラッチョリーニ『笑話集』からの一話「驢馬を背負ったある老人についての笑い話」(*Facetissimum de sene quodam qui portavit asinum super se*) に求められる⁷²。そして、上述したように、「鼠の談合の事」は、1542年のリヨン版「イソップ風寓話集成」に所収の、アステーミオの『第二・百話集』の中にも見いだされ、その事実はすでに、天理大学所蔵の同刊本を詳しく検討した遠藤氏

によって指摘されている⁷³。ただし、同刊本は、ヴァッラの「イソップ寓話集」を始めとして、いくつもの寓話集から構成されているが、そこには、ポッジョの『笑話集』は含まれていない。他方、たとえば1535年頃にチューリヒで刊行された「イソップ風寓話集成」には、アステーミオの「猫の首に鈴を吊そうとする鼠たちについて」に加え、ポッジョの「驢馬を背負ったある老人についての笑い話」も含まれているのである⁷⁴。もちろん、この事実だけからはいかなる積極的な推論も立てることはできないであろうが、少なくとも、さらなるイソップ風寓話集成の探索の必要性と、また可能性を示しているということ是可以である⁷⁵。

附論 「狐と山羊」の伝承について

本論において、ロレンツォ・ヴァッラのラテン語訳から、最初の寓話「狐と山羊」について紹介した。この物語は「鼠の会議」とは異なり、古代ギリシアから「イソップ寓話」として伝えられてきた由緒ある一作品である。とはいえ、註において指摘したように、現在において標準的な校訂版として参看されるシャンブリ版やペリー版、そして、それらを底本とした邦訳版と比べると、大意は変わらないとしても、いくつかの異同が見られる。以下、いくつかのテキストを読みながら、「イソップ寓話集」の伝承について、その一端を考えてみたい。

まず、アウクスブルク稿本 (*Augsutana*) に準拠しているシャンブリ版によれば、「狐と野羊」(*Ἀλώπηξ καὶ τράγος*) の寓話は以下の通りである⁷⁶。

Ἀλώπηξ πεσοῦσα εἰς φρέαρ ὑπ' ἀνάγκης ἔμεινε. Τράγος δὲ δίψει συνεχόμενος ἐγένετο κατὰ τὸ αὐτὸ φρέαρ· θεασάμενος δὲ αὐτὴν ἐπυνθάνετο εἰ καλὸν ἔστι τὸ ὕδωρ· ἢ δὲ τὴν

συντυχίαν ἀσμενισαμένη εἰς ἔπαινον τοῦ ὕδατος κατέτεινε, λέγουσα ὡς χρηστὸν εἶη τὸ ὕδωρ, καὶ καταβαίνειν αὐτὸν παρήγει. Ἐπεὶ δὲ ἀμελετήτως κατήλθε διὰ τὴν ἐπιθυμίαν, ἅμα τῷ τὴν δίψαν σβέσαι μετὰ τῆς ἀλώπεκος ἐσκόπει τὴν ἄνοδον. Καὶ ἡ ἀλώπηξ ὑποτυχοῦσα εἶπε· Χρήσιμον οἶδα, ἐὰν μόνον θελήσης τὴν ἀμφοτέρων σωτηρίαν. Θέλησον οὖν τοὺς ἐμπροσθίους πόδας ἐρείσαι τῷ τοίχῳ, ὀρθῶσαι δὲ τὰ κέρατα, ἀναδραμοῦσα δὲ ἐγὼ καὶ σὲ ἀνασπάσω. Τοῦ δὲ πρὸς τὴν παραίνεσιν αὐτῆς ἐτοίμως ἐπακούσαντος, ἡ ἀλώπηξ ἀναλομένη διὰ τῶν σκελῶν αὐτοῦ καὶ τῶν ὤμων καὶ τῶν κεράτων ἐπὶ τὸ στόμα τοῦ φρέατος εὐρέθη καὶ ἀνελθοῦσα ἀπηλλάττετο. Τοῦ δὲ τράγου μεμφομένου αὐτὴν ὡς τὰς ὁμολογίας ἀθετήσασαν, ἐπιστραφεῖσα εἶπε τῷ τράγῳ· Ὡ οὔτος, εἰ τοσαύτας φρένας εἶχες ὅσας ἐν τῷ πῶγωνί σου τρίχας, οὐ πρότερον ἂν κατεβηθήκεις πρὶν τὴν ἄνοδον ἐσκέψω.

Οὕτως καὶ τῶν ἀνθρώπων τοὺς φρονίμους δεῖ πρότερον τὰ τέλη τῶν πραγμάτων σκοπεῖν, εἴθ' οὕτως αὐτοῖς ἐγχειρεῖν.

狐が井戸の中へ落ち、しようがなく、そこでじっとしていました。喉が渴いて仕方のない山羊が、その井戸のところへやって来ました。そして狐を見つけると、その水が美味しいかどうか尋ねました。狐は、この偶然にほくそ笑みつつ、その水を誉めちぎり、いかにその水が美味しいかを語って、山羊に降りてくるように勧めました。山羊はひたすら水が飲みたかったので何も考えることなく下に降り、喉の渴きがおさまると、狐とともに登る手立てを考えました。すると狐が、応えて言いました。「もし君に、二人とも助かる手立てに協力する気が

あればだが、私は上手なやり方を見つけたのだが。つまり、君の前の両脚を壁について、両方の角も上に向けてくれないだろうか。そうすれば、私は駆け上がって、それから君を引き上げるから」。山羊が狐の提案に喜んで従ったので、狐は山羊の両脚と両肩と角を順に飛び上がり、井戸の縁につくと、そこから出て去ろうとしました。そこで山羊は、約束を破ったと狐を責めたのですが、狐は山羊の方を振り向くと言いました。「ねえ、山羊さん、おまえのあご髭ほどの数の知恵がお前にあったならば、前もって井戸から上がることを考えずに、そこに降りたりはしなかつただろうに」。このように、知恵のある者は、自分の行為の結末について予め考えないで、それに着手すべきではありません。

ヴァツラ訳と比較すると、物語の進行は類似しており、後付け教訓も同様なメッセージを伝えている。大きく異なるのは冒頭の箇所であり、ヴァツラの場合には、喉が渴いた狐と山羊がともに井戸の中へ降りていったことから始まる。他方、シャンブリ版では、狐が井戸の中に落ちて登れなくなっており、山羊を欺いて井戸の中に誘い、自らが助かろうという意図が明確である。両者の相違は、底本としたギリシア語写本の相違に由来する。シャンブリ版とペリー版が依拠している、アウクスブルク稿本 (Augsutana) の中核となるのは、アウクスブルク旧蔵で、現在はバイエルン国立図書館所蔵のミュンヘン写本 564 である⁷⁷。これは 13～14 世紀の写本であるが、原本は 1～2 世紀に遡ると見なされており、231 話を含んでいる。他方、ヴァツラが底本とした写本は完全には特定されていないが、別のグループ、すなわち、アウクスブルク稿本から出た異版と言うべき、ウィーン稿本 (Codex

Vindobonensis 130) を中核とするウィーン校訂本 (Vindobonensis)、もしくは、1479 年 (あるいは 1480 年) にギリシア語版を刊行したボヌス・アックルシウス (Bonus Accursius) が拠った、アックルシウス稿本 (Accursiana) に属している⁷⁸。アックルシウス稿本は、14 世紀の初めに、ビザンティンのマクシモス・プラヌデスによって、アウクスブルク稿本とウィーン稿本から編纂されたものであり、ルネサンス期以降、ギリシア語原典として流布していた。アウクスブルク稿本は 1812 年になってようやく、ヨーハン・ゴットリープ・シュナイダーによって出版された。以下、ウィーン稿本とアックルシウス稿本から、ハウスラート校訂版に拠ってテキストと試訳を掲げる。

άλωπηξ καὶ τράγος ἐν φρέατι ἐνέπεσον. τοῦ δὲ τράγου σκοπομένου τὴν ἄνοδον ἢ ἀλώπηξ “χρήσιμον τί,” ἔφη, “θάρσει, ἐπιενόηκα εἰς τὴν ἀμφοτέρων σωτηρίαν.” ὁ τράγος ἔφη· “πῶς”; ἢ ἀλώπηξ εἶπε· “τοὺς ἐμπροσθίους σου πόδας τῷ τοίχῳ προσερείσας καὶ τὰ ὀρθῶς σταθεῖς ἔγκλινον καὶ ἀρθεῖσα ἄνωθεν εὐθέως καὶ παραχρῆμα ἀναγάγω σε ἐνθεν.” τοῦ δὲ ἐτοίμως πρὸς τὴν παραίνεσιν ὑπηρετήσαντος ἢ ἀλώπηξ ἀλλομένη διὰ τῶν σκελῶν αὐτοῦ ἐπὶ τὰ νῶτα ἀνέβη καὶ ἀπ’ ἐκείνου ἐπὶ τὰ κέρατα διερισσαμένη καὶ γενναίως ἐκτιναχθεῖσα ἐπὶ τοῦ στόματος τοῦ φρέατος εὐρέθη καὶ ἀνελθοῦσα ἀπηλλάττετο. ὀρχουμένης δὲ αὐτῆς καὶ παιζούσης ὁ τράγος μεμφόμενος αὐτὴν καὶ ὄνειδίζων ὡς τὰς ὁμολογίας παραβαίνουσαν ἐπιστραφεῖσα εἶπεν·

“ὦ οὗτος, ἀλλ’ εἰ τοσαύς φρένας εἶχες ὀπόσας ἐν τῷ πῶγωνί σου τρίχας, οὐ πρότερον κατεβέβηκας πρὶν τὴν ἄνοδον ἂν ἐσκέψω.” ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι οὕτω καὶ τὸν φρόνιμον

ἀνθρώπων δεῖ πρότερον τὰ τέλη τῶν πραγμάτων σκοπεῖν, εἴθ’ οὕτως αὐτοῖς ἐγχειρεῖν.⁷⁹

狐と山羊が井戸の中に落ちました。山羊が登る手立てを考えていると、狐が言いました。「ご安心なさい。私は二人のための手段として有益なことを思いついたのですから」。そこで山羊は尋ねました。「どうするのですか」。狐は答えます。「あなたの前の両脚を壁にしっかりつけて、真っ直ぐと立ってください。そうすれば、私が上へと順に登って行って、すぐに上からあなたを引き上げます」。山羊が狐の提案に喜んで従ったので、狐は、山羊の両脚から背中へとかけ上がり、そこから両方の角を支えにして登り、井戸の縁へ着いて、そこから出て去ろうとしました。狐が喜びながら飛び跳ねているので、山羊は、狐に文句を言い、約束を破ったと責め立てましたが、狐は山羊の方を振り向くと言いました。「ねえ、山羊さん、お前にそのあご髭ほどの数の知恵があったならば、前もって井戸から上がることを考えずに、そこに降りてはこなかったらうに」。この物語は、このように、知恵のある者は、自分の行為の結末について予め考えないで、それに着手すべきではないことを教えています。

άλωπηξ καὶ τράγος διψῶντες εἰς φρέαρ κατάβησαν. μετὰ δὲ τὸ πεινῆν τοῦ τράγου σκεπομένου τὴν ἄνοδον ἢ ἀλώπηξ ἔφη· “θάρσει, χρησιμὸν τι καὶ εἰς τὴν ἀμφοτέρων σωτηρίαν ἐπιενόηκα.” Εἰ γὰρ ὄρθιος σταθεῖς τοὺς ἐμπροσθίους τῶν ποδῶν τῷ τοίχῳ προσερείσεις καὶ τὰ κέρατα ὁμοίως εἰς τοῦμπροσθεν κλινεῖς, ἀναδραμοῦσα διὰ τῶν

σὼν αὐτὴ νῶτων καὶ κέρατων καὶ ἔξω τοῦ
φρέατος ἐκέιθεν πηδήσασα καὶ σὲ μετὰ τοῦτο
ἀνασπᾶσω ἐντεῦθεν.” τοῦ δὲ τράγου πρὸς
τοῦτο ἐτοίμως ὑπηρετησαμένου ἐκείνη τοῦ
φρέατος οὕτως ἐκπηδήσασα ἐσκίρτα περὶ τὸ
στόμιον ἠδομένη. ὁ δὲ τράγος αὐτὴν ἐμέμφετο
ὡς παραβαίνουσαν τὰς συνθήκας. ἡ δὲ “ἀλλ’
εἰ τοσαύτης,” εἶπε, “φρένας ἐκέκτησο, ὅπως
ἐν τῷ πῶγωνί τρίχας, οὐ πρότερον ἂν κατέβης
πρὶν ἢ τὴν ἀνοδὸν σκέψασθαι.”

ὁ μῦθος δηλοῖ, ὅτι οὕτω καὶ τὸν φρόνιμον
ἄνδρα δεῖ πρότερον τὰ τέλη σκοποῦτα τῶν
πραγμάτων, εἴθ’ οὕτως αὐτοῖς ἐγχειρεῖν.⁸⁰

喉が渴いていた狐と山羊が井戸の中に
降りて行きました。水を飲み終え、山羊が
登る手立てについて考えていると、狐は言
いました。「ご安心なさい。私は二人のた
めの手段として有益なことを思いついた
のですから。というのも、もしあなたが真
っ直ぐに立って、前の両脚を壁にしっかりと
付け、同じように両方の角を壁に立てか
けるならば、私はあなたの両肩と両方の角
を伝って跳んで上がり、井戸の外に逃れ出
て、それからあなたを引き上げましょう」。
山羊がこれに喜んで従ったので、狐は井戸
のそとに出て、縁の周りを飛び跳ねて喜び
ました。そこで山羊は、約束を破ったので
はないかと狼を責め立てましたが、狼は言
いました。「もしお前にそのあご髭ほどの
数の知恵があったならば、前もって井戸か
ら上がることを考えずに、そこに降りては
こなかっただろうに」。この物語は、この
ように、知恵のある者は、自分の行為の結
末について予め考えないで、それに着手す
べきではないことを教えています。

明らかにヴァッラのラテン語訳は、後者のグ
ループに依拠しており、「狐と山羊」の寓話を見
るかぎりでは、アックルシウス稿本により近い
ように思われる。実際、先に言及した、15 世紀
におけるイタリアにおけるラテン語訳、すなわ
ち、グアリーノ・ダ・ヴェローナ、エルモラオ・
バルバロ、オニベーネ・ダ・ロニーゴ、リヌッ
ッチョ・ダ・カスティリオーネのものはすべて、
ヴァッラと同様に、後者のグループに属する写
本を底本としていたと考えられている。その中
でも、リヌッチョ・ダ・カスティオーネ、ラテ
ン語名レミキウスの訳出した 100 編は、「イソッ
プの生涯」とともに流布し、16 世紀に刊行され
たイソップ風寓話集成にも収められることが多
かった。リヌッチョ訳の「狐と山羊」は以下の
とおりである。

100 Fabula 3 De vulpe et hireo.

Homines consilio preediti prius finem
prospiciunt, quam dant operam rebus gerendis.
De hoc audi fabulam. Vulpes et hircus
siteintes in quendam puteum ut sitim
extinguerent descenderunt, verum enim post
potum, cum egressum circumspiceret hircus,
vulpes ei comiter ait: Bono sis animo, nam quid
saluti nostre opus sit, probe animadverti. Si
enim rectus stabis et pedibus anterioribus
cornibusve muro adherebis, tuas ergo scapulas
cornuaque conscendens exibo. Cumque egressa
fuero te manu comprehendens hinc desuper
traham; huic caper prompte deservivit. Vulpes
suo exultans egressu circa os putei hircu
alludebat. At dum caper illam incusat, sibi
pacta haud servasse, ei facete vulpecula inquit:
Si ea, caper, sapientia preeditus esses, quo
pilorum ornatu istec tua barba referta est, non
prius in puteum descendisses, quam egressum

pensiculate vidisses. Significat ergo fabula, quod prudentes prius finem rei prospiciunt, quam opus inierint.⁸¹

寓話 3 狐と山羊

思慮深い人は、為すべき事柄を始める前に、結果について見通します。このことについては、次の寓話を聞いてください。喉が渴いた狐と山羊が、渴きを癒そうとして、ある井戸に降りていきました。さて、水を飲み終わり、山羊が帰り道を探していると、狐が山羊に愛想よく言いました。「安心しなさい。われわれが救われるために必要なことは、私がよくよく考えてありますから。もしあなたが真っ直ぐに立って、両脚と両方の角を壁に押しつけるならば、私はあなたの両方の肩と角を伝って昇り、外に出るでしょう。私が脱出したら、あなたの両手をつかんで、上からあなたを引き揚げましょう」。山羊は狐に喜んで従いました。狐は飛び跳ねながら脱出し、井戸の口で山羊をからかいました。山羊が狐を、約束を守らなかったと責めると、子狐はずる賢く山羊に言いました。「山羊さんよ。もしお前に、そのふさふさしたご髭ほどの知恵があったならば、井戸に降りていく前に、脱出することについて予め考えていただろうに」。それゆえ、この寓話は、知恵ある者ならば、物事を始める前に、その結果について見通さなければならない、ということの意味しています。

ここでは、前置き教訓が付加され、内容についても潤色されている箇所もあるが、後者のグループの属していることは明白である⁸²。リヌッチョの翻訳の重要性は、彼が訳出した 100 篇の寓話の内、17 篇がシュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」に収められた点にも求められる。

この 17 篇の中に、「狐と山羊」も入っており、おそらくこのラテン語版を介して、この寓話はわが国に移入された。遠藤潤一氏の指摘するように、そのスペイン語版が参看された可能性が強いので、同訳版も紹介する。

Dela rraposa & del cabron.

Los ombres de buen consejo primero mjran el fin ante que començen las cosas que quieren fazer, segund se coge desta fabura. La rraposa & el cabron por causa de beber descendieron a vna fuente o pozo. E despues que uvieron satisfecho ala sed, mjraron la salida del pozo que era diffiçile & mala. Sobre la qual considerando, dixo la rraposa. Hermano, oy mi consejo, que yo he pensado que cosa conviene para que salgamos de aqui con salud. Si tu quieres estar derecho sobre tus pies & llegar te ala pared conlos cuernos: yo subire por tus espaldas et cuernos et assi salida, como fuere suso, tomar te he conla mano & con mj ayuda saldras. El cabron siguiendo el consejo dela rraposa, fizo como ella persuadio et salida la rraposa dela fuente, estando en saluo, escarnesçia al cabron. E el cabron como acusasse ala rraposa dela yguala et contrato que le non queria cumplir, segund que entre ellos avia passado rrequiriendo la que tuviesse & complisse, rresponde le ella. ¡O cabron cortes! Si tu fuesses proueido de sabiduria & prudençia como eres abundado de barbas, non uvieras desçendido al pozo antes que mjraras & pensaras la salida. Et assi significa esta fabula que el prudente & entendido primero deve pensar el fin antes que comiençe la obra⁸³.

狐と山羊。

良き思慮をもつ人は、為そうとしている事

柄を始める前に、予め結果を見通します—
—以下の寓話から理解できますように。狐
と山羊は水を飲もうとして、ある泉、すな
わち井戸に降りていきました。二人は喉の
渴きを癒すと、井戸から上る手立てを探し
ましたが、とても難しそうでした。それ
について考えていた狐は言いました。「兄弟
よ、私の提案を聞いてください。私は、こ
こから安全に上がるために必要なことを
考えました。もしあなたが両足で真っ直ぐ
立って、両方の角を用いて、壁に寄りかか
るならば、私はあなたの両肩と両方の角を
伝って昇り、上部に着いたならば、あなた
に手を貸しますから、私の助けであなたは
昇ることができるでしょう」。山羊は提案
に従って、言われるままにしました。狐は
井戸から出て安堵すると、山羊をからかい
ました。そこで山羊が、両者の間で交わし
た約束を、狼が果たそうとしていないと責
め立て、それを果たすように求めると、狼
は言いました。「礼儀正しい山羊さんよ、
お前にあご髭ほどの豊かな思慮があった
ならば、前もって脱出について考えずに井
戸に降りてくることはなかったろうに」。
こうして、この寓話は、知慮と知恵のある
人は、事柄を始める前に結果について考え
ねばならない、ということの意味していま
す。

天草版『イソポのハブラス』と古活字版『伊
曾保物語』で共通する寓話は25篇に過ぎないの
であるが、この寓話は両方に、すなわち、前者
では「狐と、野牛の事」として、また後者では
「野牛と狐の事」として登場している。

『イソポのハブラス』

狐と、野牛大きに渴して、或る井^{あがは}⁸⁴の中

へ連れ立^だつて入^いって、思^{まも}ふ儘に飲^{のち}うで後、
上^{あが}がらう様^{やう}が無^なかつたところで、種々に思
案^{あん}してみたれども、別にせつ様も無^なうて、
狐野牛に力を添^そえて言^いふは、「いかに野牛
殿^{どの}お氣遣^げひあるな、二人共に^{にん} 恙^{つがな}う上^{あが}る道
を巧^{たく}み出^いいた、先^{さき}ず御^ご邊^{へん}伸^のび上^{あが}つて前^{まへ}足を
井^いの側^{かた}に投^なげ掛^かけ、頭^{かしら}をも前^{まへ}に傾^かけてござ
れ、某^{それがし} それを踏^ふまへて先^{さき}へ上^{あが}つて、又御
邊^{へん}をも引^ひき上げうずる」と言^いふ、野牛「こ
の儀^{りやう}げにも^{じやう} 85」と領^{りやう}掌^{じやう}して、その言^いふ儘
にしなれば、狐飛^とんで井^い桁^{げた}⁸⁶の中^{うち}に飛^とび上^{あが}
つて跳^はねびちたいて⁸⁷ 喜^{よろこ}び、余^{あま}りの嬉^{うれ}しさに
野牛のこ^{こと}をばはたとうち忘^{わす}れた。野牛
はいつ引^ひき上^あぐるぞと待^{まち}てども待^{まち}てども、
狐は知^しらぬ顔^{かほ}して居^いるによつて、野牛^の言^いつ
て言^いふは、「やあ貴^き所^{しよ}は約^{やく}束^{そく}は忘^{わす}れたか」
と問^とうたれば、狐「そのこ^{こと}ちや、御^ご邊^{へん}の
願^{ねが}⁸⁸に有^ある鬚^{あざ}の教^あ程^{たま}、頭^{あたま}に知^ち恵^えが有^あるな
らば、遠^{とほ}慮^りも無^なう井^いの中^{なか}へははひるまい
ぞ」と言^いうて嘲^{あざ}った。

下心。

賢^{さとし}い人の俗^{なら}ひには、先^{さき}ず事^{こと}を始^{はじめ}ぬ前^{まへ}に
その終^{しま}りを見るものぢや⁸⁹。

『伊曾保物語』

ある時、野牛と狐と、渴^{きつね}に望^{かつ}みて⁹⁰、
井^い桁^{げた}のう^{うち}におち入^いて水^{みづ}を飲^のみ終^{しま}つて後、
あがらんとするによしなき狐^{きつね} 申^{まうし} しける
は、「ふたりながら、この井^い桁^{げた}の中^{なか}にて死
なんもはかなき事^{こと}なれば⁹¹、謀^{はかりごと} をめぐ
らして、いざやあがらん」とぞいひける。
野牛、「もつとも」と同心^{きつね}す。狐 申^{まうし} しけ
るは、「まず御^ご邊^{へん}せいを伸^のべ給^{たま}へ⁹²。其^{その}せな
かにのぼりて上^あにあがり、御^ご邊^{へん}の手^てをとり
て上^あへ引^ひき上げ奉^{たま}らん」といふ。野牛、「げ
にも」とてせいを伸^のべける所^{ところ}を、狐^{きつね}のあ^あた
まを踏^ふまへて上^あにあがり、笑^{わら}つて⁹³ 云^いはく、

「さてもさても御邊はおろかなる人かな。その鬚ほど智恵を持ち給はば、われいかゞせん。なにとしてかは御邊を引き上げ奉らんや。さらば」とて歸りぬ。野牛、空しく井のもとに日を送りて、つゝに、はかなくなりけり。

其ごとく、我も人も難儀にあはん事は、まづわが難儀を遁れて後、人の難をも除くべし。わが身地獄に落ちて、他人樂しみを受くればとて、わが合力⁽⁹⁴⁾になるべきや。これを思へ⁹⁵。

このように邦語版では両方とも、原文の「山羊」(hircus)が「野牛」に変わっており⁹⁶、この寓話に関しては、『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』の関係性が窺われる。そのうえで両者を比較すると、『イソポのハブラス』はリヌッチョのラテン語訳を、「下心」も含めてほぼ踏襲しているのに対して、『伊曾保物語』は、野牛が井戸の中に死んでしまったことを付加しており(原文は「山羊」のその後については記していない)、また、後付け教訓では、原文とはニュアンスがかなり異なり、他人のことよりもまず自分自身のことへ気遣うことを勧めている。

この寓話は、江戸時代の人々の関心を惹いたらしく、『絵入教訓近道』にも、「野牛」を「馬」に代えて、見事に翻案されている。

馬と狐のはなし

ある野中を、馬と狐と走りしが、誤って二つながら、古井戸の中へ落ち入り、上がらんとするに、便りなし⁹⁷。その時、狐、馬に向ひて言ひけるは、「不思議の災ひ⁹⁸にて、かゝる不覚を取りたり。さりながら、二人ながら、この井の中に死なんも、口惜しき事なり。されば、まづ御身の背中に我等が乗りて先へ上がり、上より御身を引き

上げ申さん」と言へば、馬は、偽りなりとは知らず、「さらば、御身、先へ上がりて、我を引き上げ給へ」といへば、狐は、「しすましたり⁹⁹」と喜び、馬の背中へ乗りて、難なく上に飛び上がり、「さてきて、御身は愚かなるものかな。我等、先へ上がりしとて、いかでか、我が力にて上がるべき。いつまでもゆるりと、そこに居給え」とて帰りぬ。馬は空しく、井の中にて死しぬ。

その如く、何の思案もなく事を為す者は、この馬の如く、ついに人に謀らるゝものなり¹⁰⁰。

それでは、渡部温の『通俗伊蘇普物語』へと続いていく、レストレンジ、ジェイムズの翻訳ではいかに表現されているであろうか。しかし、両作品について検討する前に、ラ・フォンテーヌの寓話「狐と山羊」を一瞥しておきたい。ラ・フォンテーヌの筆は見事に再創造しているが、典拠は紛れもなくアックルシウス系、リヌッチョ系に求められる。

キツネの隊長が、すこぶる大きな角をもつ友だちのヤギと歩いた。

こちらは鼻づらより先のことは見なかったが、

相手はぺてんにかけては免許皆伝だった。のどがかわいたので、ふたりはやむなく井戸に降りていった。

そこでふたりは渴きをいやし、いずれもたっぷり飲んだあとで、

キツネはヤギに言った。「おっさん、どうしたもんだらう。

飲んだだけじゃやすまない、ここから出なくちゃならない。

おまえの足を上へあげな、それから角も。それを壁に寄せかけるんだ。お前の背中に

おれがまずよじのぼる。
それから角の上へあがり、
そのしかけを利用して、
この場所からおれは出る。
そのあとでおまえをひっぱりあげる」。
「わたしのひげにかけて」と相手は言う。
「それはいい。おまえさんのように、
よい分別のある者をわたしはほめるよ。
わたしには、とつても、そんな秘訣は
みつからなかったろう、正直のところ」。
キツネは井戸から出て、連れをそのままに
しておいて、
忍耐づよくあれ、と
けっこうなお説教をしたものだ。
「もし天が」とかれは言う。「とくべつに、
あごのひげと
同じくらいの判断力をおまえに授けてい
たら、
おまえは軽率にも
こんな井戸に降りにはしなかったろうに。じ
ゃ、さよなら。おれは外に出た。
おまえも抜け出せるようにがんばるんだ
な、できるだけのことをして。
おれにはちょっとした用事があって、
道草をくってはられないんだ」。
なにごとにおいても先のことを考えよ¹⁰¹。

レストレンジも同様に、アックルシウス系、
リヌッチョ系に拠っているが、本文はいくぶん
説明的に訳しており、「教訓」も原典とは微妙に
趣旨が異なるものとなっている。

Fab. LXXXIII. A Fox and Goat.

A Fox and a Goat went down by Consent
into a Well to Drink, and when they had
Quench'd their Thirst, the Goat fell to Hunting
up and down which way to get back again.

Oh ! says Reynard, Never Trouble your Head
how to get back, but leave That to Me. Do but
You Raise your self upon your Hinder Legs
with your Fore-Feet Close to the Wall, and then
stretch out your Head: I can Easily Whip up to
your Horns, and so out of the Well, and Draw
you after me. The Goat puts himself in a
Posture immediately as he was directed, gives
the Fox a Lift, and so Out he Springs; but
Reynard's Bus'ness was now only to make
Sport with his Companion, instead of Helping
Him. Some Hard Words the Goat gave him, but
the Fox puts off all with a Jest. If you had but
half of much Brain as Beard, says he, you
would have bethought your self how to get up
again before you went down.

The Moral. A Wise Man will Debate Every
Thing Pro and Con before he comes to Fix
upon any Resolution. He leaves Nothing to
Chance more than Needs must. There must be
No Bantering out of Season.¹⁰²

寓話 83 狐と山羊

狐と山羊は水を飲むために、ともだつて
井戸へ降りていきました。そして二人とも
喉の渇きをいやすと、山羊は、再び戻る方
法について、あれこれと思案しはじめまし
た。狐が言いました。「さあ、帰る方法に
ついて頭を悩ますのはやめて、私に任せて
くれたまえ。あなたは後ろの両脚で立って、
前の両脚は壁について、頭を真っ直ぐに立
ててくれればよい。私がすぐにあなたの両
方の角を登って行って、井戸から出ること
ができるでしょう。そのあとで、私はあな
たを引き上げます」。山羊は命じられたと
おりに、姿勢を取って、狐を登らせたので、
狐は井戸の外に出ました。しかし、狐のお
こなったことと言えば、仲間を助けるどこ

ろか、仲間をからかうことだけでした。山羊は狐を問い質しましたが、狐は冗談を言って相手をしませんでした。狐は言いました。「もしお前にそのあご髭の半分ほどの知恵があったならば、降りて行く前に、戻る方法について考えていただろうに」。

教訓。智者は、あらゆる事柄について、解答を出すまえに賛否両方の考えを検討しなければなりません。必然が要求しているものを偶然に任せてはいけません。時宜に適わない冗談を言ってはなりません。

他方、トマス・ジェイムズが『イソップ寓話集』（初版、1848年）が採録した寓話は、アウクスブルク稿本のものと考えられ（すでに、1812年にシュナイダーによって、同稿本が刊行されている）、この寓話は簡潔にまとめられている。

Fable VI. The Fox and the Goat.

A Fox had fallen into a well, and had been casting about for a long time how he should get out again; when at length a Goat came to the place, and wanting to drink, asked Reyard whether the water was good, and if there was plenty of it. The Fox, dissembling the real danger of his case, replied, "Come down, my friend: the waer is so good tha I cannot drink enough of it, and so abundant that it cannot be exhausted." Upon this the Goat without any more ado leaped in; when the Fox, taking advantage of his friend's horns, as nimbly leaped out; and coolly remarked to the poor deluded Goat, — "If you had half as much brains as you have beard, you would have looked before you leaped."¹⁰³

寓話 6 狐と山羊。

狐が井戸に落ちてしまい、しばらくの間、

どうしたら再び外に出ることができるかを考えていました。それから、山羊がこの場所にやってきて、水を飲みたくて、狐に対して、その水は美味しいのかと、また、水はたっぷりとあるのかを尋ねました。狐は自分自身が置かれている実際の危険性を隠したままで、答えました。「友よ、降りてらっしゃい。水は美味しすぎて、十分に味わえないほどです。また、たっぷりとあってとても飲みきれないほどです」。これを聞いて、山羊は何も考えずに飛びおりました。狐は、この友の両方の角を利用して、巧みに外へと跳びでました。そして冷たく、この欺かれた、哀れな山羊に言いました。「もしお前に、そのあご髭の半分ほどの数の知恵があったならば、飛び降りる前に、予め見通していただろうに」。

そして、渡部温は『通俗伊蘇普物語』において、この寓話を要領よく、かつほぼ正確に、以下のように訳出している。

第二 狐と野羊の話

或狐溜井に落^{あが}て。上らんとするに手がゝりなければ、如何にせんと思案する内に。野羊水を飲むと其処^{そのところ}に來り。狐の首を出したるを見て。やぎ「狐公水は好御坐りますか。たんとありますか」とへば。狐誠の事を推隱し。「イヤモウ。好水で御坐ります。サア此処へ下りなさい。なかなかたいうそあつて私には飲^{のみ}尽ませぬ」といふ故。野羊何の遠慮もなく直に躍こむ。そうすると狐がすかさず角へ手をかけ、首を踏へて跳上り。心よしの野牛をふりかへりて冷笑ひ。狐「もし汝が髭の半分ほども智恵をもつてみたなら、跳下る前によく見たらうに¹⁰⁴

蛇足を一つ。言うまでもなく、キリスト教の伝道において、最も重要なことは、キリスト教の教理を知らしめることであり、そのためにカテキズム、すなわち教理問答集が存在する。1549年8月、フランシスコ・シャヴィエル（サヴィエル）が、日本人初のキリスト者ヤジロウらを伴って鹿児島に着いたとき、自身がマラッカで完成させたカテキズムの、ヤジロウによる日本語訳を携えていた。訳語的確さなど、この邦語版には問題があったために、その後改訂が重ねられ、1591年頃に天草で国字本の「どちりなきりしたん」が、翌年にローマ字本の「*Doctrina Christan*」が刊行された。続いて、1600年には長崎で、ローマ字本と国字本の改訂版が刊行されている¹⁰⁵。

こうした事情は、16世紀にイエズス会が中心となって布教していった「新大陸」においても例外ではない。中米のアステカ族は1519年にコルテスによって征服されたが、その土地の言語のひとつであるナワトル語に翻訳された、最初の（あるいは、現存する中で最古の）書物は、1539年にメキシコで刊行された、ナワトル語とスペイン語で両方の言語で記されたカテキズムであった。そして、日本において「イソップ寓話集」が続いて翻訳されたように、メキシコにおいてもナワトル語への翻訳が試みられ、47篇の寓話について、メキシコ国立図書館、パリのフランス国立図書館、パークレイのバンクロフト図書館に写本が伝えられている。翻訳者は判明していないが、フランシスコ会士ベルナルディノ・デ・サアグン（Bernardino de Sahagún, 1499-1590）がその候補として挙げられている。このナワトル語訳の底本については、1489年刊行のスペイン語版「イソップ寓話集」に所収されていない寓話を多く含んでいるために、これに求めることはできない。1479年に初版が刊行された、アックルシウス稿本系のギリシア語原

典、あるいは、リヌッチョによるラテン語訳が参照された可能性が高い¹⁰⁶。この47篇の最初に、「狼と山羊」の寓話は「野羊とコヨーテ」として取められている¹⁰⁷。

山羊とコヨーテは喉がひどく渴いていたので、ともに井戸に飛びこみました。喉の渴きが癒されると、山羊は周りを見回して、そこから脱出する手段を見つけようと思いました。コヨーテが言いました。「ご心配なく。私が、ここから脱出する手段については考えがありますから。もし、あなたが真っ直ぐと立ち、前脚を壁に押しあて、顔を上げて角を掲げるならば、私があなただの背中から登って行って、井戸の外に出ることができるでしょう。私が外に出たならば、あなたを助けて外に出しましょう」。山羊はコヨーテの提案をよいものと考えて、コヨーテに従いました。山羊のおかげでコヨーテは登る道を見いだしたが、そこから脱出してしまうと、井戸の縁から山羊をあざ笑いました。山羊がコヨーテの嘲りに怒ると、コヨーテは山羊に言いました。「おお、友よ。もしお前の頭が、お前の顎髭ほどに豊かだったならば、まず初めに、井戸に飛び込む前に、脱出の仕方について考えていただろうに」。

この寓話はわれわれに、のちに、無思慮で愚かな者になることのないように、とりわけ、われわれがおこなおうとしていることについて考えることがいかに必要であるかを教えています。

さらに蛇足を一つ。わが国ばかりではなく、メキシコにおいても、「イソップ寓話集」が訳出されているとすれば、そこにイエズス会の伝道上の方針、あるいは戦略を言うべきものを感じ

ざるをえない。この点から見るならば、17世紀初頭の中国で作成された、中国語版イソップ寓話集の存在は、けっして驚くべきものではない。かつて(1928年)、新村出は、イエズス会宣教師ニコラス・トリゴー(Nicolaus Trigaut, 1577-1610、1610年来華)、中国名金尼閣による『況義』について詳しく紹介した¹⁰⁸。新村出の記述の訂正も含めて、内田慶市氏の労作『近代における東西言語文化接触の研究』¹⁰⁹に従って、中国におけるイソップ寓話集について紹介するならば、まず、マッテオ・リッチ(Matteo Ricci, 1552-1610、来華1593年)、中国名利瑪竇の『崎人十篇』(1608年)に6話程度が見いだされる。その6年後の1614年には、ディエゴ・デ・パントーニャ(Diego de Pantojia, 1571-1618、来華1559年)、中国名龐我の『七克』(1614年刊行)には7篇が収められ、さらに、ニコラウス・トリゴー(Nicolaus Trigaut, 1577-1626、来華1610年)が全部で38篇を訳出している。これらの寓話はすべて、内田氏の研究において原文が紹介されているが、残念ながら「狐と山羊」の寓話は見いだされない¹¹⁰。

ギリシア以来、現代に至るまでの「イソップ寓話集」の伝統は長大で、錯綜を極めてはいるが、以上、わが国の「イソップ寓話集」の伝承に関連するかぎり、その一側面を紹介した¹¹¹。

註

1 ARTE DA LINGOA DE IAPAM COMPOSTA PELLO Padre Ião Rodriguez portugues da Cõpanhia de IESV diuidida em tres LIVROS. COM LICENÇA DO ORDINARIO, E SVPERIORES EM Nagasaqui no Collegio de Iapão da Compahia de IESV Anno. 1604. 印影版は、『日本大文典』、ジョアン・ロドリゲス原著、島正三編、文化書房博文社、1969年。Cf. Ernest Mason Satow, *The Jesuit Mission Press in Japan*. 1591-1610,

[Privately Printed.], 1888, p.46. [復刻版、明治文化研究会、1925年; 天理図書館出版部、雄松堂書店発売、1976年]

2 ARTE, p.90. 『日本大文典』、ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註、三省堂、1955年、165頁。

3 ARTE, p.91. 邦訳、166頁。

4 現存する唯一の版は、ブリティッシュ・ミュージアムに所蔵されている。Cf. Kenneth B. Gardner, *Descriptive Catalogue of Japanese Books in the British Library Printed before 1700*, London: The British Library / Tenri: Tenri Central Library, 1993, pp.411-412. 複製本としては、京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶穌会版伊曾保物語』、京都大学国文学会、1963年、および『天草版イソポ物語』、大英図書館本影印、福島邦道解説、勉誠出版、1976年がある。標準的な校訂版は、新村出・終源一校註『吉利支丹文学集』下、「日本古典全書」、朝日新聞社、1960年、に収められた『イソポのハブラス』であり、同書は、『吉利支丹文学集』2、米井力也解説、「東洋文庫」570、平凡社、2008年、において復刻されている。以下の版も有益である。大塚光信『キリシタン版エソポ物語 付古活字本伊曾保物語』、角川書店、1971年 [改訂版、『キリシタン版エソポのハブラス私注』、臨川書店、1983年]。

5 これらの刊本に間には大きな異同は見られない。標準的な校訂版は、『假名草子集』、「日本古典文学大系」90、岩波書店、1961年、に収められた、森田武校註『伊曾保物語』である。

6 土井忠生「天草本伊曾保物語と方言」、『方言』、第4巻第1号(1934年1月)に所収。引用は、「天草本伊曾保物語」、同『吉利支丹文献考』、三省堂、1963年、62頁による。

7 新村出『天草本伊曾保物語』、改造社、1928年、「新增附録」、『伊曾保物語』の旧代和本。『新村出全集』第7巻、筑摩書房、1978年、に所収。

8 森田武『假名草子集』(上掲)、「解題」24-25頁。

9 詳しい考究は以下でなされている。遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究』正編、風間書房、1983年。

10 『假名草子集』(上掲)、451-452頁。『キリシタン版エソポのハブラス私注』(上掲)、233頁。

11 『日葡辞書』によれば、「Danco. ダンカウ(談合) Catari auasuru. (語り合はせる) 相談」(『邦訳日葡辞書』、土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店、1980年)。『イソポのハブラス』における用例としては、「……と談合して取って食した」(『吉利支丹文学集』下 [前掲]、228頁)、「先ザイソポに談合してお返事を申さうずる」(同、247頁)、「イソポを奉らうずるとの談合半ばであつたところに」(248頁)、「何とか談合が破れつらう」(同、275頁)。

- 12 経験の豊かな老人。底本頭注による。
- 13 年功を積んだ身分の高いねずみ。底本頭注による。
- 14 評議して決定すること。底本頭注による。
- 15 その現場に臨まずに、安全な所にすわっていて言う大言壮語である。底本頭注による。
- 16 自分自身手を下してする事はできないくせに、他人のする事には何かと口出しすることのたとえ。底本頭注による。
- 17 ほんとうの心得はないくせに、太鼓代わりに畳みをたたき、手拍子を取りながら舞・踊にひとかどの口をきく意。底本頭注による。
- 18 校訂版としては、武藤禎夫校注『万治絵入本伊曾保物語』、岩波文庫、2000年がある。「鼠ども談合の事」は、159-160頁。「第十七 鼠ども談合の事 ある時、鼠、老若男女相集まり、詮議しけるは、『いつも猫といふ徒ら者に亡ぼさるゝ時、千度悔やめども、その益なし。かの猫、声を立つるか、然らずは、足音高くなどせば、かねて用心すべけれども、ひそかに近付く程に、油断して、取らるゝのみなり。いかゞせん』といひければ、古老の鼠、進み出で申しけるは、『詮ずる処、猫の首に鈴を付けて置き侍らば、易く知りなん』といふ。皆々、「尤も」と同心す。『然らば、この内より、誰出でてか、猫の首に鈴を付け給はんや』といふに、上臈鼠より下鼠に至るまで、『我、付けん』といふものなし。これによつて、その度の議定、事終らで、退散しぬ。その如く、人の健気だてをいふも、畳の上の広言なり。戦場に向へば、常に兵といふ者も、震ひわなゝくとぞ見えける。然らずは、なんぞ速かに、敵国を亡さ(ざ)る。腰抜けの居ばかりい、畳太鼓に手拍子とも、これらの事をや申すべし」。
- 19 翻刻は、朝倉治彦編『假名草子』第2巻、東京堂出版、1981年に所収。該当するのは210-212頁。以下も参照。『万治絵入本伊曾保物語』[前掲]、286-290頁。武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』、東京堂出版、1997年、111-113頁。
- 20 印影版は、武藤禎夫編『軽口咄本集』上(複製)、古典文庫、1976年に所収。該当箇所は94-96頁。翻刻版は、武藤禎夫編『軽口咄本集』下(翻刻)、古典文庫、1976年に所収。該当箇所は102頁。以下も参照。武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』、113頁。
- 21 校訂版は『万治絵入本伊曾保物語』[前掲]に所収。該当箇所は243-244頁。以下も参照。武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』、108-111頁。
- 22 校訂版には、渡部温訳『通俗伊蘇普物語』、谷川恵一解説、「東洋文庫」693、平凡社、2001がある。
- 23 *Aesop's Fables: A New Version, Chiefly from Original Sources*, by The Rev. Thomas James, M.A., ... With More than One Hundred Illustrations Designed by John Tenniel, London: John Murray, Albermarle Street, 1848.
- 24 *Three Hundred Aesop's Fables. Literally Translated from the Greek. By the Rev. Geo. Fyler Townsend, M.A. with One Hundred and Fourteen Illustrations, Designed by Harrison Weir and Engraved by J. Greenaway*, London: George Routledge and sons, 1867.
- 25 以下を参照。片桐芳雄「渡部温の『通俗伊蘇普物語』について」、『暁斎』、39号(1989年10月)、10-15頁。なお、タウンゼント版からの邦訳が、同時期に、福沢英之助によって『訓蒙話草』全91話として刊行されている。
- 26 *Aesop's Fables*, p.112. 他の版、たとえば1852年版や1866年版では108番(p.76)となっている。1863年版については未詳。
- 27 『通俗伊蘇普物語』(前掲)、101頁。
- 28 この点については、小堀桂一郎『イソップ寓話——その伝承と変容——』、中公新書、1978年(再版、講談社学術文庫、2001年)、第2部4「国民的普及の開始」に詳しい。
- 29 Esopé, *Fables*, ed. Emile Chambry, Paris: Les Belles Lettres, 1927.
- 30 Ben Edwin Perry, *Aesopica. A Series of Texts Relating to Aesop or Ascribed to Him or Closely Connected with the Literary Tradition that Bears His Name. Vol.1: Greek and Latin Texts*, Urbana: The University of Illinois Press, 1952.
- 31 *Fabulae Aesopicae Collectae*. Ed. C. Halm, Leipzig: Teubner, 1925.
- 32 二宮フサ訳『イソップの寓話』、白水社、1971年は、シャンプリ版所収のフランス語訳、およびコムランのフランス語訳(*Fables d'Esoop*, traduction par P. Commelin, Paris: Garanier, s.c.)を底本としているが、「鼠の会議」の物語は含まれていない。
- 33 「鼠の会議」の物語自体は、6世紀にシリアの司教代理巡察史ベルヴィが、インドの古典『パンチャタントラ』を中心に、ペルシア語で著した寓話集に入っていたと推定される。というのは、ベルヴィ訳は現存しないが、570年頃にブードがベルヴィ訳から作成した古典シリア語の寓話集に収められているからである。他方、イブン・ル・ムカッファイが8世紀半ばに作成したアラビア語版『カリラとディムナ』の最古の写本(1221年、イスタンブールのアヤ・ソフィア図書館蔵)には、「鼠の会議」が収められている。しかし、一般的にこの部分は、ムカッファイの筆に帰されていない(この点については、イブヌル・ル・ムカッファイ『カリラとディムナ——アラビアの寓話』、菊池淑子訳、平凡社「東洋文庫」331、1978年を参照)。その後、ヨーロ

ツバ世界で「鼠の会議」が初めて現れるのが、イングランド出身のオドー・ド・シェリトン (c.1185-c.1247) が編んだ『寓話集』(Fabulae) であり、『猫の書』は、そのほぼ忠実なスペイン語訳である。

34 *Aesop's Fables*, "Introduction," p.xviii: "one takes the turn of a Greek epigram, another follows the lively and diffusive gossip of Horace: some walk more in the track of the Greek verse of Babrius, some in that of the Latin verse of Phaedrus: a few adopt the turn given by L'Estrange, or speak almost in the very words of Croxall or Dodsley."

35 … With *Morals and Reflexions*, By Sir Thomas L'Estrange, Kt., London: R. Sare, T. Sawbridge, B. Took, M. Gillyflower, A. & J. Churchil, and J. Hindmarsh, 1692.

36 *Fables of Aesop*, Fab. CCCXCI, London, 1699, p.360. 以下「考察」(Reflection) が続く。 "This is the course of the World, to the very Life, we can never want Advisers and Councillors in Matters of the Greatest Hazzard: But let the Reason be never so clear, we are still at a Loss for an Instrument to put Dangerous Projects in Execution. Desperate Cases require Desperate Remedies; but let the Hazzard of this or that part of a Body be what it will, it is matter of Duty, Justice and Policy to consult the Good of the whole. It was the Interest of the Mice to have a Bell put about the Cats Neck, and they all agreed upon't to be a very good Expedient: But what it came to the Issue, the Counsel fell to the Ground for want of one to put it in execution. This is no more then what we see frequently in difficulties of State; but the true Reason of failing in that Case, proceeds rather from some Failings in the Administration, then from any want of necessary Instruments. As for the Purpose, where Reward and Punishment are inverted, and where Men of Faith and Zeal for the Honour and Service of the Common-wealth are only made Sacrifices to the Passions and Interests of the Corrupt and Fearful. Where Matters are thus Manag'd, I say, every Man is not of a Constitution to Leap a Gulf for the Saving of his Country: Especially, when over and above the certainty of Ruin, Men are no less sure of having their very Names and Memories abandon'd to Infamy and Contempt for their Pains: But on the other hand, where Christian as well as Political Justice has its Course, every part of Community suffers by Consent with the whole: and such a Government in the uttermost of Extremities, shall never fail of Devotes." レストレンジの関係については、すでに小堀桂一郎『イソップ寓話』(207頁)に指摘がある。

37 今野一雄訳、『寓話』(上)、岩波文庫、1972年、115-117頁。原文は以下の通り。 "Un conseil tenu par les rats. Un

Chat, nommé Rodilardus / Faisait de Rats telle decomfiture / Que l'on n'en voyait presque plus, / Tant il en avait mis dedans la sépulture. / Le peu qu'il en restait, n'osant quitter son trou, / Ne trouvait à manger que le quart de son soû; / Et Rodialrd passait, chez la get misérable, / non pour un Chat, mais pour un Diable. / Or un jour qu'au hout et au loin / Le Galand alla chercher femme, / Pendant tout le sabbat qu'il fit avec sa dame, / Le demeurant des Rats tint chapitre en un coin / Sur la nécessité présenté. / Dès l'abord leur Doyen, personne fort prudente, / Opina qu'il fallait, et plus tôt que plus tard, / Attacher un grelot au cou de Rodilard; / Qu'ainsi, quand il irait en guerre, / De sa marche avertis ils s'enfuiraient sous terre; / Qu'il n'y savait que ce moyen. / Chacun fut de l'avis de Monsieur le Doyen; / Chose ne leur parut à tous plus salutaire. / La difficulté fut d'attacher le grelot. / L'un dit: Je n'y vas point, je ne suis pas si sot; / L'autre: Je ne saurais. Si bien que sans rien faire / On se quitta. J'ai maints chapitres vus, / Qui pour néant se sont ainsi tenus: / Chapitres non de Rats, mais chapitres de moines, / Voire chpitres de chanoines. // Ne fait-il que délibérer, / La cour en conseillers foisonne; / Est-il besoin d'exécuter, / L'on ne rencontre plus personne." (La Fontaine, *Oeuvres complètes*. I. Fables contes et nouvelles, Édition établie, présentée et annotée par Jean-Pierre Collinet, Paris: Gallimard, 1991, pp.71-72).

38 Cf. *Oeuvre de J. de La Fontaine*, tom.1, ed. par M. Henri Regnier, Paris: Hachette, 1883, p.133; La Fontaine, *Oeuvres complètes*, ed. par Jean-Pierre Collinet, p.1080. 小堀桂一郎『イソップ物語』(207頁)も参照。ラ・フォンテーヌは聖職者の会議に言及しているが、この点は、先に紹介した『猫の書』における記述と類似している。

39 アステーミオの生涯と著作については以下を参照。 G. Castellani, "Lorenzo Abstemio e la tipografia del Soncino a Fano," *La Bibliofilia*, 31 (1929), pp.413-423, 441-460; 32 (1930), pp.113-130, 145-150; L. Bertalot, "L'antologia di epigrammi di Lorenzo Abstemio nelle tre edizioni sonciniane," in *Miscellanea Giovanni Mercati*, Città del Vaticano, 1946, vol.4, pp.305-326; C. Mutini, "Astemio (Abstemius, Abstemio), Lorenzo," in *Dizionario biografico degli italiani*, Roma: Istituto della Enciclopedia Italiana, vol.4, 1962, pp.460-461; G. Tournoy, "Laurentius Abstemius," *Bulletin de l'Institut historique Belge de Rome*, 42 (1972), pp.189-210.

40 Venezia: Johannes Tacuinus, de Tridiono, 1495. Cf. *Incnabula Short Title Catalogue*, British Library (=ISTC) ia00100000; Staatsbibliothek zu Berlin, *Gesamtkatalog der*

- Wiegendrucke / Inkunabelsammlung* [=GW] Nr.126.
- 41 Venezia: Johannes Tacuinu, de Tridino, 1499. Cf. ISTC ia0011000 (GW 127); ISTC ia00012000 (GW 128).
- 42 “... ad res honestas utilesque peragendas suis fabellis magis quam philosophi sui praeceptis alliciut” (ed. 1499, fo.la ii v).
- 43 詳しくは以下を参照。Carlo Filosa, *La favola e la letteratura esopiana in Italia dal Medio Evo ai nostril tempi*, Milano, 1552; Paul Thoen, “Aesopus Dorpii. Essai sur l’Esope latin des temps modernes,” *Humanistica Lovaniensia*, 19 (1970), pp.241-316; Idem, “Les grands recueils esopiques des XVe et XVIe siecles et leur importance pour les litteratures des temps modernes,” in *Acta Conventus Neo-Latini Lovaniensis: Proceedings of the First International Congress of Neo-Latin Studies*, Louvain 23-28 August 1971, ed. J. Ijsewijn and Kessler, Louvain and Munchen, 1971, pp.659-777; David March, “Aesop and the Humanist Apologue,” *Renaissance Studies*, 17 (2003), pp.9-26.
- 44 初版は1474年にミラノで刊行。 *Vita Esopi fabulastoris clarissimi e greco latina per Rimicium facta*, Mailand: Antonius Zarrotus, 1474. Cf. ISTC ia00099000; GW 335.
- 45 *Fabelle Esopi translate e greco a Laurentio Vallenfi secretario illustrissimi domini Alfonsi Regis Aragonum dicata Arnaldo Fenolle da eiusdem domini Regis secretario*. Cf. ISTC ia00104500 (GW 318).
- 46 Cf. ISTC ia00104800 (GW 319); ISTC ia00104900 (GW 320); ISTC ia00105000 (GW 321); ISTC ia00108100 (GW 329); ISTC ia00107500 (GW 327); ISTC ia00107400 (GW 326); ISTC ia0010600 (GW 003251ON); ISTC ia00106500 (GW 323); ISTC ia00107000 (GW 324); ISTC ia00107300 (GW 325); ISTC ia00105100 (GW 322); ISTC ia00108000 (GW 328).
- 47 Cf. ISTC ia00104600 (GW 316); ISTC ia00104200 (GW 315); ISTC ip00857000 (GW 316 [II,III]; GW M34576).
- 48 テキストはロベルタ・ガッリの校訂版による。Roberto Galli, *The First Humanistic Tranlations of Aesop*, Thesis, University of Illinois at Urbana-Champaign, 1978, p.152.
- 49 Cf. August Hausrath (ed.), *Corpus Fabularum Aesopicum*, vol. I, Leipzig: Teubner, 1957, p. XXXIII, Nr. 9.
- 50 Phaedrus, *Fabulae aesopiae*, IV, 9, in *Barbarius and Phaedrus*, ed. and trnas. By Ben Edwin Perry, Cambridge Mass.-London: Harvard University Press, 1965, pp.314-315. 邦訳は、バエドルス／バブリオス『イソップ風寓話集』、岩谷智・西村賀子訳、国文社、1998年、95-96頁。
- 51 Otto Crusius, *Barbrii Fabulae Aesopeae*, Leipzig: Teubner, p.165.
- 52 ただし、現在「イソップ寓話集」として一般的に参照される、シャンブリー版やペリー版、そして、それらを底本とした邦訳版と比べると、大意は変わらないとしても、いくつかの異同が見られる。この寓話は、『イソポのハプラス』および『伊曾保物語』にも採録されており、テキストの伝承について検討する上でも適当なケース・スタディと考えられるので、本稿の「附論」として別途論じることとする。
- 53 シュタインハーヴェル版とその影響については以下を参照。Robert T. Lenaghan, “Steinhöwel’s ‘Esopus’ and Early Humanism,” *Monatshefte*, 60 (1968), pp.1-8; Barbara Konneker, “Die Rezeption der aesopischen Fabel in der detutschen Literatur des Mittelalters und der frühen Neizeit,” in *Die Rezeption der Antike*, ed. August Buck, Hamburg: Ernst Hauswedell, 1981, pp.209-224; Pack Carnes, “Heinrich Steinhöwel and the Sixteenth-Century Fable Tradition,” *Humanistica Lovaniensia. Journal of Neo-Latin Studies*, 35 (1986), pp.1-29; Gerd Dick, *Heinrich Steinhöwels “Esopus” und seine Fortsetzer: Untersuchungen zu einem Bucherfolg der Frühdruckzeit*, Tübingen: Niemeyer, 1994.
- 54 Cf. Paul Thoen, “Aesopus Dorpii. Essai sur l’Esope latin des temps modernes,” *Humanistica Lovaniensia. Journal of Neo-Latin Studies*, 19 (1970), pp.241-316.
- 55 Cf. Chaucey E. Finch, “The Renaissance Adaptation of Aesop’s Fables by Gregorius Corriarius,” *Classical Bulletin*, 49 (1973), pp.44-48; Joseph R. Berrigan, “The “Libellus Fabellarum” of Gregorio Correr,” *Manuscripta*, 19 (1975), pp.131-138.
- 56 Cf. Joseph Berrigan, “The Latin Aesop of the Early Quattrocento: The Metrical Apologues of Leonardo Dati,” *Manuscripta*, 26 (1982), pp.15-23.
- 57 Cf. Paola Tesi Massetani, “Ricerche sugli Apologhi di Leon Battista Alberti,” *Rinascimento*, 12 (1972), pp.79-133; Leon Battista Alberti, *Apologhi ed elogi*, ed. e trad. da Rosario Contarino, Genova: Costa&Nolan, 1984; Alberti, *Apologhi*, ed. e trad. da Marcello Ciccuto, Milano: Rizzoli, 1989.
- 58 ただし、現在のところ所在は確認されていない。 Cf. Gianni Mombello, *Le raccolte francesi dei favole esopiane dal 1480 alla fine del seculo XVI*, Genève: Slatkine, 1981, pp.99-101.
- 59 邦語による「ノヴェツラ」について概説・研究は数少ない。以下を参照。米山善晟「イタリアの古典説話—中世・ルネッサンス期のノヴェツラ」、三宅幸久編『ラテン世界の民間説話』、世界思想社、1989年、32-48頁；米山善晟・鳥居正雄『イタリア・ノヴェツラの森』、佐

井寺三角社、1993年。

60 Cited by Filosa, *La fabola e la letteratura ...*, cit., p.84.

61 Cf. 伊藤博明「ボッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』——シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」のスペイン語版について」、『埼玉大学紀要(教養学部)』、第45巻2号(2010年3月)、(1)-(15)頁。

62 E.g. *Fabulae per latinissimu uirum Laurentium Abstemium nuper compositae*, Fani: Hieronym. Soncinus, 1503; *Laurentii Abstemii viri elegantis & amoeni ingenii Fabulae elegantiss. Nuper clariss. Peotam & philosophum Gargetium emaculatae. Fabulae ex graeco in latinum per Laurentium Vallam virum clarissimum uersae*, Parmae: per Franciscum Vgoletum, 1513.

63 Cf. Thoen, “Aesopus Dorpii,” cit., p.205.

64 Cf. Ibid.; Leopold Hervieux, *Les fabulistes latins depuis le siècle d'Augsute jusque'à la fin du moyen age*, tom.1, Paris: Firmin-Didot et Cie., 2me ed., 1893, pp.623-624.

65 Cf. Thoen, “Aesopus Dorpii,” cit., pp.205-206.

66 *Aesopi et aliorum fabulae ... Abstemi Hectamythium secundum*. Venetiis: per Ioan. Ant. De Nicolinis de Sabio, 1539.

67 *Aesopi Phygis et aliorum fabulae*. Tiguri et Officina Froschovian; Aesopi Phyrigis, et aliorum fabulae. Lugdini apud Seb. Gryphium, 1542.

68 ラ・フォンテーヌの場合は、寓話の最後に、アステーミオには見いだされない聖職者への言及があるが、この点は、「鼠の会議」の中世における源泉と言うべき、オドー・ド・シェリトンにも載せられている(先に引用した『猫の書』を参照)。したがって、ラ・ファンテーヌはオドーのラテン語版、もしくはそのフランス語版『イソペ』を参照した可能性もある。参考までに、両方のテキストを挙げておく。

De muribus et catto et cetera.

Mures habuerunt semel consilium qualiter se a Gato possent premunire. Et ait quidam Mus sapiens: Ligetur campanella in collo Cati, et tunc poterimus ipsum quocumque perrex[er]it audire et insidias eius precauere. Placuit omnibus hoc consilium. Et ait Mus unus: Quis ligabit campanellam in collo Cati? Respondit Mus unus: Certe non ego. Respondit alius: Nec ego pro toto mundo ei uellem tantum appropinquare.

Sic plerumque contigit quod clerici, monachi insurgunt contra episcopum, priorem, uel abbatem, dicentes: Vtinam esset talis amotus, et alium episcopum uel abbatem haberemus! Et [hoc] placeret omnibus. Tandem dicunt: Quis opponit se contra episcopum? Quis accusabit eum?

Alii sibi timentes dicunt: Non ego, nec ego. Et sic minores permittunt maiores uiuere et preesse.

(*Odonis de Ceriton Fabulae*, in Léopold Hervieux, *Les Fabulistes latins depuis le siècle d'Auguste jusqu'à fin du moyen âge*, tom. 4: Eudeds de Cheriton et ses dérivés, Paris: Firmin Didot, 1896, LIVa, pp.225-226.)

鼠たちと猫など。

あるとき、鼠たちが会議を開いて、いかにして猫に対して自らを守ることができるかを相談しました。ある知恵ある鼠が言いました。「猫の首に鈴をつけましょう。そうすれば、猫がどこを歩んでいたとしてもその場所が開き取ることができ、猫の待ち伏せを警戒することができるでしょう。この提案を全員が気に入りました。しかし、ある鼠が言いました。「誰が猫の首に鈴をつけるのでしょうか」。ある鼠が答えました。「私は嫌です」。別の鼠が答えました。「猫には近づくだけでも、ぜったいに嫌です」。

同様なことがよく起こります。すなわち、聖職者や修道士が司教、小修道委員長、大修道委員長に対して立ち上がり、今の某をやめさせて、別の司教や修道院長を戴こうと提起することがあります。これを全員が賛成します。しかしながら、「誰が司教に反対するのか、誰が司教を断罪するのか」と問われますと、皆はこぞって恐くなって、「私は嫌だ、私は嫌だ」と言います。このようにして、身分の低い者たちは、身分の高い者たちが生きながらえ、抑圧するのを許してしまうのです。

De la souris e du chat.

Les souris pristerent conseil coment du chat se peussetnt garder. Donc dist une sage souris: « Aiex lié une campenele au col le chat e donc porron oïr de quele part il voist e nos de li garder. » Ce pleut a touz e une dist: « Qui liera la campenele a son col? » Chescune respondi: « Certes, ne mie je. » Ausi avient sovent que les clers qui se lievent contre lor evesque, les moines contre lor abbé e dient: « Bien seroit se cestui estoit remué. » E pleit a touz. Donc dient: « E qui comencera cest plai contre le evesque ou contre le abbé? » Donc dit chescun endroit de sei: « Ne mie may, ne mie may. » E issi eschapent. (*Les Parables Mayster oe de Cyrintime*, [LVII], in *Les Fables d'Eude de Cheriton*, Recueil général de Isoets. 4me tom., publiées par Pierre Ruelle, Paris: Société des anciens textes français, 1999, pp.52-53.)

鼠と猫について。

鼠が会議を開いて、いかにして猫に対して自らを守ることができるかを相談しました。ある知恵ある鼠が言

いました。「猫の首に鈴をつけましょう。そうすれば、猫がどこを歩んでいたとしてもその場所が聞き取ることができ、猫からわれわれを守ることができるでしょう。この提案を全員が気に入りましたが、しかし、ある鼠が言いました。「誰が猫の首に鈴をつけるのでしょうか」。鼠の各々が答えました。「私は嫌です」。同様なことがよく起こります。すなわち、聖職者が司教に対して、修道士が修道院長に対して立ち上がり、「今の某をやめさせてしまおう」と言うことがあります。これを全員が賛成します。しかしながら、「誰が司教や修道院長に対する不満を述べるのでしょうか」と問われますと、皆はこぞって恐くなって、「私は嫌だ、私は嫌だ」と言います。こうして、彼らは助かるのです。

69 註33を参照。「鼠の会議」の文学的な伝統については、いまだに以下の論文が参考となる。Paul Franklin Baum, “The Fable of Belling the Cat,” *Modern Language Notes*, 34 (1919), pp.462-470. 本稿は「猫の首に鈴をつける」(1)と題したが、今後、この文学的伝統について考察を深めたい。

70 小堀桂一郎『伊曾保物語』原本考(上)(下)——シュタインヘーヴェル本『イソップ集』に就いて——、『文学』、第46巻10号(1978年10月)、136-148ページ；第46巻12号(1978年12月)、91-1112ページ。同『イソップ寓話』(前掲)。

71 遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究』、正編・続編・総説編、風間書房、1983・1984・1987年。

72 前掲書、総説編、239-242、495-499頁。伊藤、前掲論文も参照。

73 同書、246頁。

74 Op. cit., p.148 (Abstemius), pp.233-234 (Piggius)。

75 『伊曾保物語』の「鼠の談合の事」の原典として、アプステミウスの『第二・百話集』を所収したイソップ風寓話集成に特定するのが躊躇されるのは、これも典拠が見いだされていない『伊曾保物語』の最終話「出家と盗人の事」が、アプステミウスの寓話の中世的起源であった、オドー・ド・シェルダンの『寓話集』中の一編「罪人のために主に祈願する義人について」(De quodama justo rogante dominum proquodam peccatore)と類似しているからである(インターネット上での指摘による。Cf. <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiagio/cicada/isopo.html>)。

76 上述したように、シャンブリ版(およびペリー版)からは優れた翻訳が存在しているが、ここでは他の版との比較検討をおこなうために、できるだけ直訳に近い私訳を用いる。

77 シャンブリ版とペリー版の間にも、少なからぬ相違が

見られる。ペリー版に拠った中務哲郎訳も参照されたい(前掲、29-30頁)。ペリー版の表題は「井戸の中の狐と山羊」である。

78 Cf. Thomas Otto Achilis, “Aesopus Graecus per Laurentium Vallensen Traductus Erfurdiae 1500,” *Münster Museum für Philologie des Mittelalters und der Renaissance*, 2 (1913-1914), pp.222-229; Idem, “Die Aesopusübersetzung des Lorenzo Valla,” *Münster Museum für Philologie des Mittelalters und der Renaissance*, 2 (1913-1914), pp.239-278; Chauncey E. Finch, “The Greek Source of Lorenzo Valla’s Translation of Aesop’s Fables,” *Classical Philology*, 55 (1960), pp.118-120.

79 Ed. Hausrath, nr.9 (II), pp.14-15.

80 Ed. Hausrath, nr.9 (III), p.15.

81 In Steinhovel, *Esopus*, p.245.

82 前置き教訓は、シュタインヘーヴェルの付加による。

Cf. Rinucius Aretinus, *Fabulae aesopicae*, ed. M. P. Pillolla, Genova, 1993, p.146. 同訳については以下を参照。

Thomas Otto Acelis, “Die Fabeln des Rimichius in Staehinöhöwels Aesop,” *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, 42 (1912), pp.315-330;

Idem, “Die Hundert äsopischen Fabeln des Rinucci da Castiglione,” *Philologus*, 83 (1928), pp.55-88; Chauncey E.

Finch, “The Alphabetical Notes in Rinuccio’s Translation of Aesop’s Fables,” *Medievalia et Humanistica*, 11 (1957), pp.90-93; Ben Edwin Perry, “The Greek Source of Rinuccio’s Aesop,” *Classical Philology*, 29 (1934), pp.53-62.

83 *Esopete ystoriado (Toulouse 1488)*, Ed. by Victoria A. Burrus and Harriet Goldberg, Madison: The Hispanic Seminary of Medieval Studies, 1990, p.109.

84 井戸の意。底本頭注による。

85 いかにも。もつともである。底本頭注による。

86 井戸の上部の縁を木で四角に組んだもの。底本頭注による。

87 「踊つつ、跳ねつすること」(和らげ)。底本頭注による。

88 下顎。底本頭注による。

89 「東洋文庫」版、321-322頁。『キリシタン版エソポのハプラス私注』(上掲)、78-79頁。

90 喉が渴くこと。底本頭注による。

91 みじめである。底本頭注による。

92 背伸びをして、身のたけを高くする。底本頭注による。

93 あざけり笑う。ばかにして笑う。底本頭注による。

94 援助、助勢、力添え。底本頭注による。

95 『假名草子集』(上掲)、448-449頁。『キリシタン版エソポのハプラス私注』(上掲)、230頁。

- 96 「野牛」という表現が誤訳なのか、あるいは意図的なのかは判断できないが、狐が野牛の「頤に有る鬚」に言及しており、この表現に違和感は否めない。ただし、『日葡辞書』には、「Yaguiu. ヤギユウ（野牛） 野の牛、牝山羊、あるいは牝山羊」とあり、ここでは、「山羊」の意味と取るべきかもしれない。
- 97 頼みになる手がかりがない。底本脚注による。
- 98 思いがけない災難。底本脚注による。
- 99 うまくやってのけた。しめたと。底本脚注による。
- 100 『万治絵入本伊曾保物語』[前掲]、243-243頁。以下も参照。武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』、106-107頁。
- 101 巻の3、5、前掲訳、169-171頁。ラ・フォンテーヌは、「序文」の寓話の効能について論じる際にも、この寓話に言及している。「ところで、どんな方法がこれらの寓話よりも有効にそういうことに貢献することができるだろう。ひとりの子どもにこんなことを言うてみるがいい。クラッススはバルティア人を攻めに行き、その国に深くは入りこみ、どうしてそこから出てくるのか考えなかった。そのため、退却しようとどんなに努力してもだめで、かれもその軍隊も滅びることになった、と。同じ子どもにこう言うてやるがよい。キツネとヤギがのどの渇きをいやすために、井戸の底に降りた。キツネは友だちの肩と角をはしごがわりにして、井戸から出た。ところがヤギは、そんな先のことを見通していなかったのだから、出られなかった。だから、なにごとにおいても先のことを考えなければならない、と。わたしはずねよう。このふたつの例のどちらがその子に深い感銘をあたえるか、と。まえの例よりもあとの例のほうが幼い子どもの心にいつそうふさわしく、釣り合いのとれないものでもないのだから、このほうに子どもは注意をむけるのではなからうか」(35-36頁)。
- 102 L'Estrange, op.cit., p.80.
- 103 James, op.cit., pp.27-28.
- 104 『通俗伊蘇普物語』巻之一、第二、25-26頁。
- 105 『吉利支丹文学集』2 (前掲)に所収の「どちりなきりしたん」への「解説」を参照。また、海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』、教文館、1991年の該当箇所も参照。
- 106 Cf. Gordon Brotherston, "Aesop auf Aztekisch / Aesop in Azte," in *Aesop in Mexico. Die Fabeln des Aesop in aztekischer Sprache / A 16th Century Aztec Version of Aesop's Fables*, Text mit deutscher und englischer Übersetzung, Aus dem Nachlaß von Grete Kutscher, herausgegeben von Gordon Brotherston und Günter Vollmer, Berlin: Gebr. Mann Verlag, 1987, pp.10-52.
- 107 テキストとしては、上記『メキシコのイソップ』に所収の、ドイツ語訳・英語訳に拠る (*Aesop in Mexico*, pp.59, 61)。
- 108 新村出『伊曾保物語』の漢訳、『明星』、1928年。「新村出全集」第7巻(前掲)、pp.396-419頁に採録。
- 109 関西大学東西学術研究叢刊17、関西大学出版部、2001年、第1部「イソップ東斬」。
- 110 内田氏は、戈賓権「談利瑪著作中翻譯介紹的伊索萬言——明代中譯伊索萬言史話之一——」(『中國比較文學』第1期、1984年、浙江文藝出版社)から、興味深い見解を引用しており、以下、孫引きで引用する。「当時のイエズス会士たちは東方に布教にやってくる時には、みな『イソップ寓話』を携えており、しばしばその中の寓話を引用して、モラルを説いたのである。裴化行 [Henri Bernard] の『利馬竇傳』 [*Le Père Mathieu Ricci et la société de son temps*, 1937] には『ある一人の役人がイエスの事跡を述べた小冊子に見入っているのを見て、私は、これは我々の教えに使うものだから差し上げられないと言い、代わりに一冊のイソップを贈った』とある」(前掲書、「まえがき」)。ここで、われわれの疑問は、イエズス会士たちが、どの「イソップ寓話」を携えてきたのかという点と、また、それにはイエズス会本部からの指示があったのかという点にある。
- 111 参考文献も膨大な数にのぼるが、古代の伝統とギリシア語のテキストについてはベン・エドウィン・ペリーの古典的研究を、ヨーロッパの伝統については、レオポルト・ヘルヴェューのテキスト集成とクラウス・グルプミュラーの研究を挙げておきたい。Ben Edwin Perry, *Studies in the Text History of the Life and Fables of Aesop*, Haverford, Pa.: American Philological Association, 1936; Léopold Hervieux, *Les Fabulistes latins depuis le siècle d'Auguste jusqu'à fin du moyen âge*, 5 toms., Paris: Firmin Didot, 1883-1889; Klaus Grubmüller, *Meister Esopus. Untersuchungen zu Geschichte und Funktion der Fabel im Mittelalter*, Zürich und München: Artemis Verlags, 1977. 最も詳細な書誌は以下である。Parck Carnes, *Fable Scholarship. An Annotated Bibliography*, New York - London: Garland Publishing, 1985. 邦語文献としては以下がある。小堀桂一郎『イソップ寓話——その伝承と変容』(前掲)、中務哲郎『イソップ寓話の世界』、ちくま新書、1996年)。